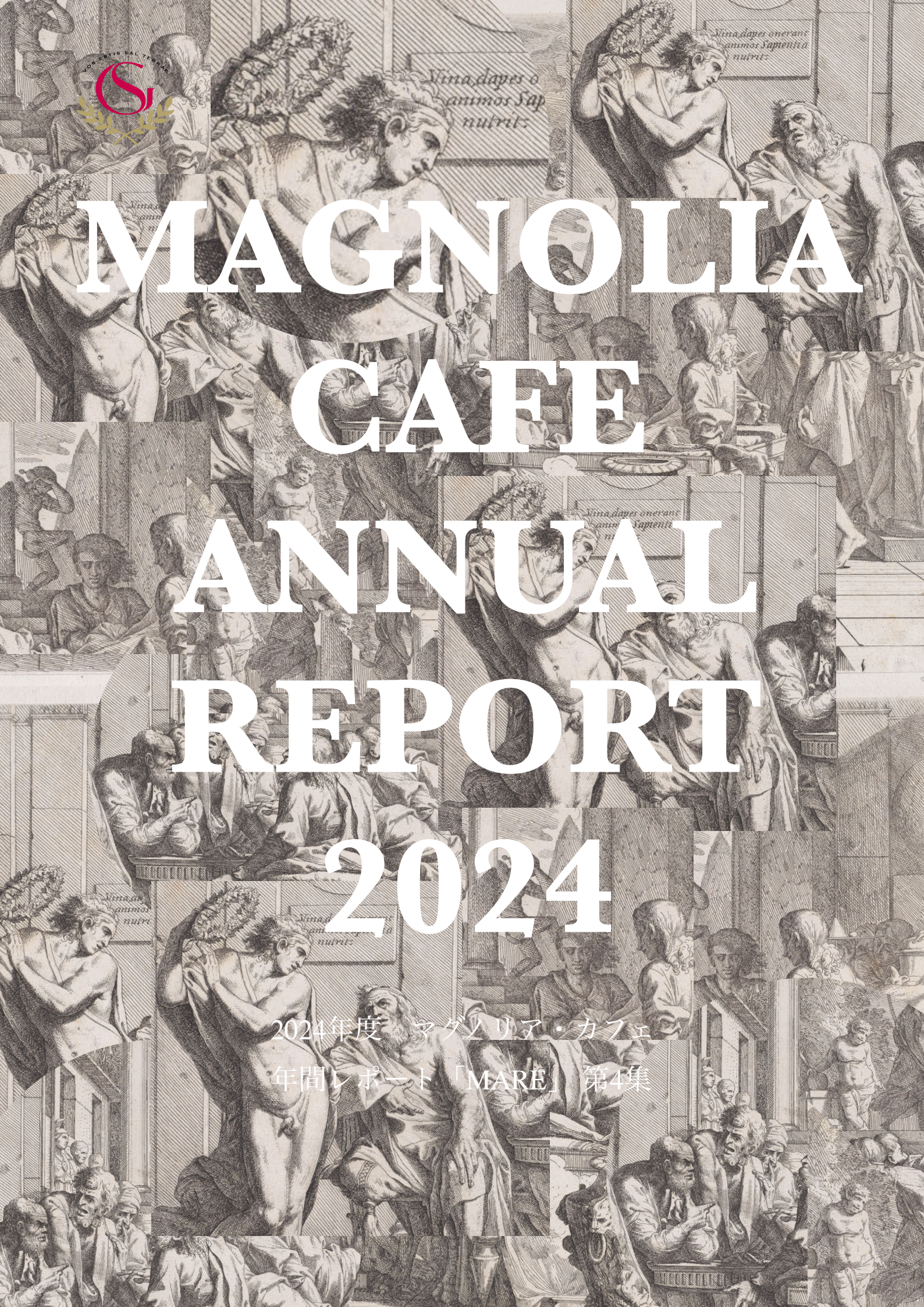




MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2024

2024年度 マグノリア・カフェ
年間レポート「MARE」第4集

MAGNOLIA CAFE ANNUAL REPORT 2024

2024 年度 マグノリア・カフェ

年間レポート「MARE」 第4集

四国学院大学

まえがき

マグノリア・カフェ運営委員長
ネルソン橋本 ジョシュア諒

〈Postmodern Cafe〉(PM カフェ)の活動を継承し、マグノリア・カフェとして再出発を遂げてから早くも4年が経つ。大学生活に例えるなら、卒業を控えた4年生のようなものだ。委員長として、4年間の活動が無事に継続できたことは何より喜ばしいことであり、新型コロナウイルスのパンデミックを経て、活動がさらに充実したことを実感している。

この4年を振り返ると、マグノリア・カフェは多くのカフェの活動に支えられてきたことが分かる。何年も継続しているカフェもあれば、新しく加わったカフェもある。また、教員の退職に伴い終了したカフェもある。今年度は合計10のマグノリア・カフェが開催され、教室の中では得られない新たな学びの形が、着実に形成されつつある。まさに〈知のコミュニケーション〉の場が提供されていると感じる。

2024年度も、このように年間の活動を一冊の冊子としてまとめ、皆さんの手元に届けることができた。本レポート「MARE」第4集の作成と校正に携わった教職員、そして学生一人ひとりに心から感謝を申し上げたい。

本レポートには、生き生きとした活動記録が綴られており、見どころ満載である。本学の学生の皆さんには、もしマグノリア・カフェの活動に少しでも興味を持ったなら、ぜひ来年度は活動に加わってほしい。そして、読者の皆さんにとって、本レポートの活動報告がささやかな刺激となり、現代社会を生きる私たちの〈問い〉と出会うきっかけになれば幸いである。



「MARE」第1、2、3集

目次

戦跡と戦争の記憶を考える	1
“不快”な学寮の可能性を追う	5
踊ろうぜ	9
珈琲・ホビー・ハウス 第4章 自己と他者、孤独と寂しさ	16
ポストモダン学校カフェ	20
日韓文化コラボ	24
Barefoot	28
コミュニティ・シアターを構築する	32
Yongaku Well-being Network 2024	37
カフェ Z	40
付録① マグノリア・カフェ ストール（大学祭） & フォーラム（報告会）	44
付録② マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉	45

戦跡と戦争の記憶を考える

担当教員：井上 雅義

戦跡と戦争の記憶を考える 概要

「戦争の記憶の継承」を訴えるだけでなく、記憶の再構築が必要ではないか。映画『夜と霧』の欧米各国の受容プロセスを分析したオランダの歴史学者ファン・デル・クナープ（注1）は、映像が集合的記憶の再構築に資する事を明らかにした。個人の記憶と過去を保存する歴史的叙述との中間に「集合的記憶」を位置付けると仮定し、私たちは日本の戦争の「集合的記憶」について多角的に議論しなくてはならない。

広島・長崎の被爆、特攻隊という狂気、南京虐殺など戦争犯罪の加害者としての集合的記憶を抹消してはならない。戦争という最も複雑な社会現象を単純化する危うさを警戒し、多角的にレイヤーを解剖する必要がある。

平和主義を標榜してきた「戦争をしない 79 年間」は財産である。この財産を安易に放棄する軍国主義化に反対し抵抗するために絶えず思考したい。

ノーベル平和賞、日本被団協が受賞

2024 年 10 月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）がノーベル平和賞を受賞した。ノーベル委員会は授賞理由として次のように述べている。

「ノルウェー・ノーベル委員会は、(広島、長崎の)生存者たちが、肉体的苦痛や辛い記憶にもかかわらず、大きな犠牲を払った経験を生かして平和への希望と関与を育むことを選んだことをたたえたい。」

「いつの日か、私たちのなかで歴史の証人としての被爆者はいなくなるだろう。しかし、記憶を残すという強い文化と継続的な取り組みで、日本の新しい世代が被爆者の経験とメッセージを継承している。彼らは世界中の人々を刺激し、教育している。それによって彼らは、人類の平和な未来の前提条件である核

のタブーを維持することに貢献している。」(2024 年 10 月 11 日、朝日新聞)

ノーベル委員会のヨルゲン・フリードネス委員長は広島や長崎の若者が被爆者体験の継承に取り組んできたことを高く評価し「日本の新しい世代だけでなく、(世界中の) 私たち全員が被爆者の証言や体験を共有する責任がある」とインタビューに答えている。40 歳の若い委員長は学校の授業で被爆者のことを学んだと言う。

広島・長崎の平和教育は優れた実績があり、オスロで開かれた授賞式に派遣された長崎の「高校生平和大使」がオスロの高校や市民集会などでレクチャーや交流会に参加するなど現地でも注目された。

しかし以前、平和活動をしている広島の大学生から「日本軍の戦争犯罪について知り、原爆被害の事だけ主張していいのか躊躇している」と打ち明けられた事がある。

これと似たような事は、アメリカで原爆投下を批判すると「真珠湾攻撃が悪い」と応酬するケースだ。このロジックは感覚的に正当なように思えてしまうし、心情的には反論しにくい。

しかし広島・長崎の原爆投下は非戦闘員で多数の子供を含む市民を大量殺傷した「虐殺」であり、国際法違反であることに変わりない。日本軍が中国や東南アジアで国際法違反の虐殺行為を犯した事も非難に値するが、「片方の犯罪行為により他方の犯罪行為が相殺される」わけではない。これは典型的な論点のすり替えに過ぎない。

“大日本帝国”の侵略戦争の問題や旧日本軍が犯した様々な戦争犯罪はその事実と背景にある真相を究明する必要がある。

一方で広島・長崎の原爆投下は市民（民間人）を標

的にした「無差別殺人」であり、これも戦争犯罪として追及されるべきである。

このように戦争における暴力の問題を考える場合、双方の暴力を「相殺」するような議論は注意深く避けるなければならない。

広島平和研究所の田中利幸教授は論文「犯罪と責任・無差別爆撃と虐殺」で「広島・長崎原爆投下による推定20万人以上という数にのぼる民間人の瞬間時の無差別大量虐殺は、当時の国際法や国際条約に明らかに違反する歴史上まれに見る由々しい戦争犯罪、とくに『人道に対する罪』であった。」と非難し、米政府が「無差別爆撃を“精密爆撃”にすり替えて正当化してきた歴史」を考察している（注2）。

繰り返すと戦争における暴力の問題を考える場合、複数の暴力を「相殺」するような議論は誤りである。イスラエルがガザ虐殺を「精密爆撃」として正当化するロジックも、広島・長崎の原爆投下を正当化するロジックと相似形を成している。米政府が、民主党、共和党ともにイスラエルを支持する理由は広島・長崎、ベトナム戦争、イラク戦争を正当化するロジックに通じるからだと指摘しておきたい。

「毒ガスの島」を訪ねて

私たちのカフェは、旧日本軍が密かに毒ガス（化学兵器）を製造していた瀬戸内海の島を訪れた。カフェ参加者の多くが1年前に授業で広島平和記念資料館（原爆資料館）のスタディツアーを経験している。

広島県竹原市大久野島は広島側の忠海港と愛媛県大三島の盛港からフェリーで15分ほどの瀬戸内海に浮かんでいる。周囲約4kmと小さな島で1929年から毒ガス兵器が製造されていた。



広島県竹原市大久野島を訪問したカフェのメンバー

大久野島は陸軍造兵廠・東京第二陸軍造兵廠が管轄し、1929年に島全体を軍需工場として整備した。大久野島は明治初期に陸軍の大久野島砲台（芸予要塞）が設置された軍事的な役割を担ってきた。陸軍は太平洋戦争で使用する目的で毒ガス兵器（化学兵器）製造を計画し、工場の立地を検討した。陸軍は「軍需工場建設の誘致」を呼び掛け、複数の自治体が名乗りを上げたという。そうした立候補から選ばれたのが大久野島だった。当時の新聞を読むと「軍需工場の建設が大久野島に決定！」と歓迎する記事が掲載されている。もちろん「毒ガス兵器製造」とは知らされていない。

大久野島では1929年から太平洋戦争後期である1944年ごろまで、びらん剤・血液剤・催涙剤・嘔吐剤などを合計約6,600トン製造したとされる。

びらん剤の「イペリット」はマスタードガスのことである。シリア内戦でアサド政権が使用した化学兵器として知られている。もう1つの「ルイサイト」は有機ヒ素系化合物、いずれも皮膚炎や嘔吐・呼吸器障害を引き起こす神経ガスで、大久野島ではこの2つの毒ガスを主に製造した。

作業に従事した工員は防護物資の不足や頻発する事故により飛散した有害物質の被害を受けて、死亡したり後遺症が戦後も長く残る事態を招いた。毒ガ

ス障害者は戦後処理作業に従事したものを含めると、少なくとも約 6,500 人とされる。国は被害者に対する救済に消極的で社会保障が確立されるまで戦後 30 年余り要した。2015 年度時点での毒ガス被害の対象者は 2073 人、平均 88 歳になる。

毒ガス製造を始めた陸軍は国際世論の批判を恐れて大久野島の隠蔽を徹底する。1925 年のジュネーブ議定書で化学兵器の戦争利用は禁止されていたからだ。毒ガス製造を秘匿するため大久野島を「地図から消し去り」、学徒動員された作業員たちに緘口令が敷かれた。

大久野島では軍の技術者を含め、延べ 6,500 人が従事したと見られ、その多くが学徒動員された女子学生たちだった。もちろん自分たちが作っている薬品が「毒ガス」だとは知らされていない。

島の海辺に慰霊碑が建立され、千羽鶴が捧げられている。島に建つ「大久野島毒ガス資料館」は竹原市周辺市町の元工員や動員学徒など毒ガス被害者の数団体で結成された「大久野島毒ガス被害者連絡協議会」が建設し竹原市に寄贈され、1988 年に開館した。島全体は環境省が所管する国有地だが、国側は建設を許可したものの「毒ガス製造」を公表することに消極的だったという。また島内に点在する歴史遺産を恒久保存する目処は立っていない。

集団の記憶を再構築する

80 年を経て戦争を語り継ぐ体験者が少なくなり、高齢化が進んでいる。高校生平和大使の活動など「語り継ぐ」重要性は言うまでもないが、私は「戦争の記憶の再構築」の必要性を強調したい。

さらに言えば、個人の記憶だけでなく「集団の記憶の再構築」が大切だと思う。広島平和記念資料館や大久野島の毒ガス資料館、数々の戦跡、ナチスのユダヤ人強制収容所「アウシュビッツ博物館」など「現場」の痕跡を肌で感じる体験は「集団の記憶」を喚起す

る。広島、長崎、沖縄の平和教育は「集団の記憶の再構築」に役立っている。皮肉を言えば、政府が「原爆や沖縄戦の教育」に消極的な姿勢は戦争という「記憶の再構築」を避けているからではないだろうか？

日本に国立の戦争博物館が 1 つも存在しない事実は欧米諸国と比較しても不自然だ。不都合な戦争の事実を「なかったこと」にしたい意図が疑われる。

ファン・デル・クナーブは映画『夜と霧』が欧米で受け止められるプロセスを分析して記録映像による社会（集団）の「記憶の再構築」が可能であり、期待できると結論づけている。クナーブは歴史学者だがロラン・バルトの映像論を根拠にした映像の疑似体験の構造化に関しても考察している。

恐らく、「語り部の言葉」や戦跡や博物館などの「場」の体験、記録映像による疑似体験など経験を重ねる必要があるだろうが、それ以上に「記憶の再構築は可能である」という認識を持つことが鍵になるだろう。

活動について

大久野島スタディーツアーをメインにして、乃木資料館や旧善通寺偕行社、三菱の航空機工場跡（倉敷）などを訪ねて軍国主義の歴史を改めて議論した。

明治の文明開化は産業革命に出遅れて経済力に乏しい「貧しい国」が背伸びして欧米に張り合った歴史だ。偕行社は一見すると華やかだが、竹小舞に土壁を塗り、瓦を葺いた屋根という日本の伝統建築を洋館に繕った涙ぐましい建築である。

大久野島の毒ガス工場はまるで酒や醤油を製造する蔵の設備に近い。毒ガス（化学兵器）が「貧者の核兵器」と呼ばれるように安価に製造した残虐な兵器である。

事前に資料や映像で知識をもって大久野島を訪ねたが、私を含めて参加者の誰もが予想外の衝撃を受けた。島全体に工場で働いた工員たちの痕跡があり、時空を超えて悲鳴のようなものが聞こえてくるよう

な気がした。島に点在するモノにある種の「気配」を感じるのだろうか。

多木浩二が「生きられた家」(注3)で明らかにしたように建築(空間)はそこで経験した人間の営みを染み込ませる性質がある。この多木浩二の考察は戦跡にも該当するだろう。

カフェの参加者は小中学校で広島平和記念資料館を訪れたり、沖縄や長崎の戦跡を訪れた経験がある学生が多かった。経験があるほど、繰り返し「現場を見る」ことの大切さに気づかされる。

このように「現場」の重要性は経験を積むほど理解が深まると思う。今後もこの経験を生かして欲しい。
(井上雅義)



大久野島毒ガス資料館、館内は撮影禁止だった。



「大久野島毒ガス障害死没者」を追悼する慰霊碑

<参加学生>

文学部4年 大野 亜里沙

文学部3年 岡村 詩

文学部3年 田鍋 未波

文学部3年 鏡原 萌

文学部2年 岩中 真歩

文学部2年 岡田 萌詠

<カフェの活動記録>

6月7日 ランチミーティング@パフナカレーコーナー

10月12日 「ガザ虐殺」研究会@724教室

10月13日 映画『ガザ 素顔の日常』視聴@724教室

11月5日 大久野島 毒ガス戦跡 勉強会@井上研究室

11月15日 大久野島スタディツアー

12月9日 善通寺市・乃木資料館@陸上自衛隊駐屯地

12月13日 旧善通寺偕行社(陸軍社交場)

2月9日 水島航空機製作所跡@倉敷市

注

1. E.ファン・デル・クナーブ編, 庭田よう子訳, 2018, 『映画「夜と霧」とホロコースト, 世界各国の受容物語』みすず書房.
2. 田中利幸, 2009, 「犯罪と責任: 無差別爆撃と大量虐殺」『現代社会研究』12:209-215.
3. 多木浩二, 2001, 『生きられた家』岩波現代文庫.

“不快”な学寮の可能性を追う

担当教員：近藤 剛

活動の背景と問い

2023 年度は「“不快適”な学寮の可能性を追う」というテーマで活動した。その大きな動機に、マグノリア学寮入寮時に誓約をしていながら学寮でのさまざまな活動に参加することに対して不満を述べ、十分に役割を果たさない学寮生に対するアドバイザーとしての怒りがあった。また、各種活動において望んだ成果が上がらないことの要因として学寮生間の「人間関係の希薄さ」をあげながら、自発的な関係性構築に向かえない学寮生を見て、関わりを“強制”させてみることによってどのような変化が生まれるのか知りたいという思いもあった。その結果、昨年度の「年間レポート」では、「強制性が少なからず存在する」とはいえ、こうした活動が結果的には学寮生間の人間関係構築の起点」になると結論づけた。実際、マグノリア学寮内の人間関係で体育系学生と非体育系学生の交流の少なさがよく問題になり、それがしばしばトラブルにもつながっていたが、このカフェに参加した学生間では、非体育系である学寮生の演劇の公演を体育系である野球部学寮生が観劇に行くことや、非体育系と体育系学寮生が自発的にともに同じ空間でゲームに興じることもあった。

今年度は名称を「“不快”な学寮の可能性を追う」に変更したが、実際は 23 年度からの継続を意識した活動である。改めて活動の意図を整理すると、昨今の新設された大学の寮の多くは、部屋の中に冷蔵庫や電子レンジだけではなく、トイレと浴槽までもが完備されている場合があり、共同生活とは無縁の“アパート”化している。一方で、21 年に運用を始めた本学のマグノリア学寮は、風呂・トイレ・キッチンが共同であることに加え、年に 6 回程度のイベント、年に 3 回程度の掃除、毎月 1 回の各フロアのミーティング、

月に 1~2 回程度の清掃活動に参加するよう学寮生に義務付けている。

“たこつぼ化”の言葉に象徴されるように、趣味嗜好や信条を同じくする者とは活発に交流するものの、異なる者とはあまり接点を持たない傾向にあるといわれる現代社会において、マグノリア学寮のシステムは一見すると時代遅れに映るかもしれない。しかし、社会のこうした傾向に警鐘を鳴らしたのが 2011 年 1 月の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」である。ここでは、日本の教育課程において、社会的・職業的自立に向けた必要な基盤能力の育成が必要で、それらの育成には他者や社会とのかかわりが積み重なり、つながっていくことが必要とされた。

つまり、この答申を踏まえれば、時代遅れに映るマグノリア学寮の居住空間の構造と義務的活動が、実は運用次第では非常に大きな教育的価値を秘めているとも考えられる。そして、その実現には人間関係構築が必要であるが、学寮生間で自然発生的に実現することは望めないため、半ば強制的に本カフェにおいて学寮生同士の関わり合いを持たせようということが意図するところである。

マグノリア・カフェの精神からは少々、逸脱した活動であることは自覚するが、先述の内容を審査会で熟弁したところ、2 年連続の採用となった。

活動の概要

各学期ともに 2 週間に一度程度の頻度で活動を実施した。日程と内容は以下の表のとおりである。

年間の活動内容

	日程	内容
春学期	4/25	全員が顔合わせ
	5/25	交流イベント
	5/28	新入生歓迎会
	6/18	障がい学生への理解 ー視覚障がい者への支援
秋学期	9/5	学寮イベントの企画①
	9/9	学寮イベントの企画②
	9/23	学寮イベントの企画③
	10/2	交流イベント
	10/12	マグノリアカフェ・ストール
	11/9	学寮イベントの企画④
冬学期	12/2	学寮イベントの準備①
	12/10	学寮イベントの準備②
	1/20	学寮イベントの反省
	2/4	卒業生と退寮生を送る会

まず、春学期はメンバー同士が 1 年間活動を共にするメンバーを自覚し、「顔を合わせたらあいさつ程度はする」関係になることを目指した。自己紹介や簡単なゲームを行い、新入生歓迎会も実施した。こうした活動には一定の成果があったと考える。実際、新入生歓迎会ではアドバイザーが仲介することなく、学寮生同士が自ずと話し始めていたし、下の写真にあるように笑顔も多くあった。特に 2 年生以上は、前年度から引き続いた活動ということもあって、気軽な雰囲気に参加していたようで、料理も遠慮することなく注文していた。もう少し、支払う者の身にもなってほしかった。

春学期の最後には、視覚障がい者への支援を想定した活動を実施した。別グループの新入生に 1 名、視覚障がいのある者がおり、慣れない学寮の生活に戸惑うことが想定できたからである。まず初めに、学

寮の理念を踏まえてグループの垣根を超えた支援の必要性を考え、その後はクロックポジションで目の前の状況を説明したり、ペアになって交代でアイマスクを装着したまま歩行し、誘導の方法と注意点を学んだりした。視覚が制限されることによる日常生活の困難さを体験し、気が付いた者が積極的に支援に向かうことの必要性を感じたようであった。



新入生歓迎会の一幕（2024 年 5 月 28 日）

秋学期は、主体的に運営することになった学寮のイベント「クリスマスイベント」に向けた活動を中心に行った。ただ、この活動で感じたことは、1 年生と 2 年生以上のイベントに向けた熱量の差であった。2 年生以上が昨年度の経験を踏まえて積極的な発言をする一方で、1 年生はどこか遠慮しているような様子があった。遅刻や無断欠席をするわけでもなく、定刻には集合し、しっかりと会議の中に身は置いている。また、頼まれた役割は確実にこなす。ただ、企画内容について独創的で発展的な思考を披露することはほとんどなく、ただアドバイザーや上級生が決めたことに従い実行するという姿勢であった。“必ず参加すること”を強調するあまり、1 年生を委縮させてしまったのかもしれない。こうした雰囲気は、後述する冬学期の活動でやはり望まない展開を生み出してしまうことになる。



話し合いの一幕（2024年9月23日）

冬学期は12月のクリスマスイベントの運営に注力し多くの時間を費やした。本番にはアドバイザーが不在で、開寮以来、初めて学寮生のみで実施したイベントになった。その点で、イベントを完遂できたことだけでも評価できる。これは、昨年度から今年度にかけて行ってきた本カフェの活動が一つの形となって実を結んだと言えるかもしれない。ただ、一部にはイベント後の片付けに参加しない、あるいはイベント中も別グループの友人と話し込み充分な役割を果たさなかった者もいたようである。せっかく、初の学寮生のみで実施できたイベントであったにもかかわらず後味の悪さが残ったことも事実である。

年明け以降はクリスマスイベント全般の反省と、年間活動の振り返りを行った。本レポート作成時には実施していないが、退寮予定者を送る会も計画した。

参加学生の声

以下に参加した学生の年間の活動を通しての感想を記載した。

・クリスマスイベントは楽しめたと思う。

（3年・山影遥加）

主宰者より：独唱で気持ちよく歌った君は楽しめた

かもしれない。

・普段、あまり話したことない人とも話をできたことが良かった。

（3年・曾我部みれ）

主宰者より：毎時間、無遅刻無欠席で参加してくれました。

・イベントをほとんど自分たちで進行し、終わらせることができたことはよかった。

（2年・奥竜之介）

主宰者より：本当にご苦労さまでした。来年度もよろしく。

・イベントがほぼ毎月あって、大変な時もあったけど楽しかった。

（2年・雨森胡桃）

主宰者より：1年間、リーダーを務めてくれてありがとう。君がいなくなるのはさみしいです。

・イベントが多かった。でも焚き火は楽しかった。

（2年・田上嵩斗）

主宰者より：山影さんがおもしろかったからね。君もいなくなるのはさみしいよ。

・学寮生の人たちと交流できてよかった。

（1年・松田愛梨）

主宰者より：それほど前向きに交流していたようには見えなかったけど、そう感じてもらえてよかった。

・自分たちが主催したイベントはやる気もでて達成感を感じることができたが、映画祭などは長く、疲れた。

（1年・小原雄大）

主宰者より：イベントの感想などをフロア・ミーティングで共有できるようになればいいですね。

・イベントが多すぎる。人との関わりが増えたことはよかった。

（1年・山本真穂）

主宰者より：部活やバイト、学業にも多くの時間を割く中で、ご苦労さんでした。

- ・よかったことは学寮生との仲が深まったこと。

(1 年・木戸地好誠)

主宰者より：もっともっと運動系学生以外とも交流してほしい。

- ・はじめての活動だったが、場が明るくみんなが楽しんでいたのが良かったと思った。

(1 年・逢坂琳実)

主宰者より：来年は遠慮せずに考えを発信しましょう。

- ・大人数で活動する中でコミュニケーションが図れてよかった。イベントの準備はしんどかった。

(1 年・菅原康汰)

主宰者より：その経験が今後に生きてくることに期待します。

が出たと思えた。ただ今年度の活動においては、残念ながらその強制力を行使することで学寮生の主体性を奪い、良好な関係性の構築には十分に寄与することはできなかった。

それでも、教育機能の一つとしてマグノリア学寮の存在意義は揺るがないと思う。学寮生が前向きに活動に向き合えるような実践的取り組みとして、次年度も引き続き行っていきたいと考えている。

参考資料

- ・ 中央教育審議会, 2011, 答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」.



振り返り活動的一幕（2025 年 1 月 21 日）

活動の総括

本カフェの活動目的でも触れたように、多少なりの強制性があっても、それは人間関係の構築に寄与するとの思いで活動し、昨年度はそれによって成果

踊ろうぜ

担当教員：阪本 麻郁

1. 活動の理念

若者の SNS を通してのみ成立する会話や交流、ゲーム依存などバーチャルな世界への傾倒は、年々顕著さを増している。学生を観察していても、休み時間は常にスマートフォンを眺めているという学生が殆どである。スマートフォンは以前の携帯電話以上に機能が増え、SNS や GPS、オンラインゲームや動画視聴などを可能にした。また、小型で手軽に持ち運べるという事は大変便利ではあるが、以前は家庭や自身の部屋でしか出来なかった事が 24 時間どこにいても可能になったのである。この現象は、パブリックスペースの消失、身体や会話を介してのコミュニケーションの衰弱であり、その行き着く先にはいったい何があるのだろうか。

そのような状況下でダンスを通して、学生のパブリック的感觉を豊かにし、身体性や発話といったコミュニケーション能力を取り戻すことが出来るのだろうかという問いが本カフェ「踊ろうぜ」の出発点である。「すべての生命の根源的な活動」とも言えるダンスを通して、スマートフォン・ネイティブの学生たちにどのような変化をもたらす事が出来るのかという探求をカフェを通して行う。ダンスを単に技術の獲得として捉えず、「いま・ここ」にいる自分の身体と向き合い、踊ることで他者とのノンバーバルなコミュニケーションを実現し、想像力と創造力の筋肉を育てることを目指す。

今年度は、身体性と共に時間と空間を共有する芸術ダンスを軸に以下、教員が主体となったプロジェクト『ダンス・リサイクル🔄』と学生が主体となったプロジェクト『HIRAMIRU』を実施した。

2. 活動の報告

2-1. 『ダンス・リサイクル🔄』

「舞踊とは何か」を問い直していく芸術であるコンテンポラリー・ダンスは、その特質故に常に新しい作品が世に生み出されている。世界的な視点で見ると、今この瞬間にも日本のみならず世界中で次々と新たな作品が生み出さされている可能性を秘めている。それと同時に何度かリバイバル（再演）され消失していく作品が数多く存在することも事実である。本プロジェクトではその様な消失していく作品に着目し、作品から素材を抽出する事で振付家やその作品に関わった人々のノウハウ（知識・経験）やエネルギーをリサイクル（再利用）する試みを提示すると共にその可能性を学生と共に考究した

本プロジェクトは、ピナ・バウシュ率いる元ヴッパータール舞踊団のダンサーでドイツの振付家・ダンス教育家であるハイデ・テゲダー女史の許可を得、彼女が 2015 年に本学で演出・振付した SARPvol.19『空、流れる風』をリサイクルするリサーチを行い、ショー

私たちが住むこの世界には、**ダンス作品**が溢れている。今この瞬間にも世界の片隅で、誰かが新しい作品をこの世に生み出している。と同時に悲しいかな、何度か公演された後消失する作品もこの世界には溢れている。数々の消失する作品の中には、振付家やダンサー、テクニシャンのノウハウと**エネルギー**が凝縮している。そんな作品を研究し**リサイクル(再生利用)**する事で、過去の振付家、創作に関わった人たちのエネルギーもリサイクルすることを目指す。
今回は振付家**ハイデ・テゲダー**女史の許可を得、2015年に上演された SARPvol.19『**空、流れる風**』をリサイクルする**リサーチ**を行い、その過程を**ショーイング**として発表するものである。

『ダンス・リサイクル🔄』

リサーチ・ショーイング

2024年6月21日(金)19:00スタート

22日(土)14:00スタート

※西国学院大学 ノトススタジオ

演出・振付：阪本麻郁 創作・出演：土田優也 関口晴 奥電之介 吉田晴登
演奏：奥田真洋 美術：カミイゲタキヤ
音響：武内愛実 照明：亀井涼花 総務名実
制作・演出：桂渡都 協力：ノトスプロダクション SIPA
主催：西国学院大学マダノリア・カフェ『踊ろうぜ』

*入場無料、申込不要。

*スタート時間までにノトススタジオロビーにお越し下さい。

*写真や映像を撮影し、研究発表や広報に使う場合があります。

撮影NGの方はご入場をお控えください。

マダノリア・カフェとは教員と学生が自主的に行う、セミナーやワークショップなどの課外活動。マダノリア・カフェ『踊ろうぜ』では様々なテーマを、踊ることで「いま・ここ」にある身体性を通して観る下げていく。

イングとして発表したものである。

元ヴッパタール舞踊団のダンサーであったテゲダー女史の手法は、振付家ピナ・バウシュの「ダンサーに質問を投げかけ、ダンサーがその質問に動きで答える」という即興手法を用いている。そこでテゲダー女史が『空、流れる風』で当時出演した学生たちに投げかけた質問の中から以下の10の質問を私が選び出し、本リサーチに参加した学生に投げかけ、彼らが動きで答え、その動きを取り込み作品へと発展させた。

1. 「これが私だ！」を動きで表す
2. あなたはどんな子どもでしたか？
3. 何かの理由で空間に入り、方向を変え、座り、立ち上がって空間から去る
4. 5つの擬音語を動きにする
5. 気配を消して空間を横切る
6. 動物だけど人間、人間だけど動物
7. 「残念」を声で表す
8. 相手を罵倒する
9. 動詞から動きを導き出す
10. 危険なものを避けて通る

また、『空、流れる風』でテゲダー女史がテーマとして捉えた「人間の営みと成長」と「人間と自然との関わり」という2つの大きな柱に新解釈を加える事で、現在の社会情勢、時代・世代の空気感から独自性を生み出すことを試みた。

■ショーイングを終えた学生の考察

社会学部2年・吉田晴人（創作・出演）

私は今回『ダンス・リサイクル🌱』で、新たな身体感覚に出会うことが出来た。特に、「日本庭園」と名付けられた振りがまさしく新しい感覚だった。その振りはただただ5つの動きをゆっくりと繰り返すだけのシンプルなものであったが、動いている私に

も観客にも面白い感覚を与えるものだった。動いている自分自身としては、全部で7分ぐらいのものが2分程度に感じられた。そして、ある一定のラインを超えてスイッチが入るとその動きをいつまでもどこまでも続けることが出来る気がした。また、私は本番でも練習でもとても緊張するタイプなのだが今回のショーイングでは緊張もなく、ただそのタスクだけをする身体になっていた。動いている時は不思議な感覚で、意識はあるが、少し朦朧としている感じで、息をしているかどうか分からないような、知性や理性も無くなって、目的もなく本当に決まった動作だけを繰り返す生き物にでもなっているような感覚だった。

そして、稽古中にタスクに集中し過ぎたのか、動いている途中や動き終えた時、目の前が真っ暗になることが何回もあった。人は集中するとその時に必要な感覚以外はシャットダウンされると聞いたことがあるが、視覚が無くなるという事は聞いたことがなく驚き、人間の身体はとても興味深いと感じた。しかし、ショーイングでのスペーシングは即興的で毎回空間に対して配慮が必要で、そういったタスクが増えたことで、本番では視覚が無くなることがなかったことも発見である。

これらの経験を通して、人間はやろうと思えばその時その場にあった身体を作り出すことが出来ると感じた。そしてそれらの私の身体感覚により、「日本庭園」を観ている人にも何がしかの感覚が与えられたというのも興味深かった。同じことの繰り返しなはずなのになぜか観続けることが出来る。飽きない。観客がなぜ瞑想状態のようになるのか不思議に思ったが、その時、高校時代に出会ったあるアーティストの言葉を思い出した。そのアーティストは人に何かを観続けさせたり、なぜか分からないけど観てしまうように観客を誘導するには動きに必然性を持たせることが1つのポイントだ。今回それを身体で表す

ことが出来たのが、とても嬉しかった。そして、人が面白さを感じるには様々な動きがあるが、「日本庭園」はそもそも動きの面白さというより何か分からないけど観てしまうところに面白さがあるのではないかと思った。

『ダンス・リサイクル🌱』で元作品のタスクをリサイクルしたが、元作品とは全然違うものが作り出されたことにも驚いたのに加え、これから何か作品を作る時にこの手法は役に立ちそうだなと思った。



『ダンス・リサイクル』舞台写真

社会学部3年・亀井涼花（照明）

今回の『ダンス・リサイクル🌱』は、人間の成長や友情を感じた。

皆それぞれに暗い過去や悩みがあって、当たり前だが生まれ育った環境が異なっていて、成長していくにつれて我慢することだけではなく話し合ったりぶつかり合うことがある。それらを経験し、時には口

調が強くなることもあり、それは皆が通る道だと私は思えた。その度に仲直りして分かち合い、皆で1つの道に迷いなく進んでいく姿に見え、故に、この作品は人間の成長や友情を表してる、あるいは人間というものを表しているように思えた。

皆が進んできた道は当たり前のようにバラバラで、これからもバラバラだと思うが、ノトスで同じ作品に関わっている「今」は目指しているところはバラバラでも皆が同じ道にいて同じ方向を向いているのかもしれないと思うと何故か不思議な感じがした。

過去作品をリサイクルした作品のショーイングは、リサイクルされ新たな作品として生まれ変わっていく、様々な人が関わり作品を作る中でリサイクルされながらも作品は生きていく感じがとても素敵だった。

社会学部3年・関口晴（創作・出演）

今回のリサーチ・ショーイングは、座組の全員がリスペクトし合い、常に新しいものが生まれていると感ずることが出来る非常に良い環境であった。誰かを貶めることなく、過度なプレッシャーはないが、緩み過ぎることもなく、皆が各々の作業に集中していて、クリエイションをするうえで一つの理想ともいえる場であった。今後、クリエイションに参加をする際にはこのような空気作りに貢献していきたいし、私が主となる場合は、それができるメンバーを選んでいくことも重要であると感じた。また、エコな取り組みも非常に良かった。舞台はシンプルで、環境になるべく負荷をかけない人体へのエコや熱意と遊びで回っていく心地よさ。この省エネな考え方は、時代を生き抜いてきた麻郁さんだからこそ辿り着いたと思われるが、私にもできることがあるのではないだろうか。参考にしていきつつ、全てが省エネになり過ぎないよう有り余る程のエネルギーは大切にしていきたい。

パフォーマーとしての成長は、自意識からの解放が挙げられる。私の課題として常に付き纏っていた自意識との闘い。演技をしているときも、踊っているときも、今の私がどのように見られているのか、あるいは見せなければいけないかという意識に駆られる。しかし、今回のクリエイションでは、闘わずに仲良くなることができた。どう見られているかではなく、自分がどう感じているかに寄り添う。そのおかげで、ラストシーンでは毎回新鮮に、違う景色を見ることができた。また、4人のダンサーのバランスが凄く良かった。各々、違う身体性を持ち合わせ、得意な点が異なる。そして、苦手な部分でさえ、面白さとして扱われ、ぶつかり合いながら調和していくような美しさがあった。それは、リスペクトし合う精神からも来ているかもしれない。自分の得意な部分、苦手と思っている点さえ自ら認めていき、混ぜ合わせていく料理。現在、私の中にあるものをふんだんに使えたと感じる。

一方で、これから発掘していきたいことも発見した。1つは開かれた身体である。私は今回、自意識と仲良くなるために、自分の内側へ入っていった。それは、良いことでもあったが、同時に他のものが見えなくなることであった。残念なのは、音のダンスのときはあまりドラムの音が聞こえていなかった。悔しい。そんな時、非常勤講師で振付家の白神ももさんから、「常に変顔ができるくらいの方がいい」とアドバイスを頂いた。入り込んでも、すぐに戻ってこれるくらいの隙間を残しておくのだと。ショーイング当日から、外へ開きながら動くことを意識してみた。外のものがちゃんと見えた代わりに、海中を想像するシーンでカタクチイワシや宇宙は見えなかった。常に外と内、あるいは両方を選択しながら行ったり来たり出来る様になりたい。また、笑う・驚くといった身体的反応が苦手であった。感情としては持ち合わせているが、振付として「このタイミングで！」となっ

たときに詰まったように身体が緊張してしまう。後半は苦手意識が付き纏い、そのシーンでは自意識との闘いとなってしまった為、あまり楽しめなかった。また、社会問題についてはリサーチ不足であった。私の場合、好奇心旺盛で情報を集めるのには積極的だが、正誤関係や本質に辿り着けていない事に気づいた。次回は、本質とハイタッチできるようになりたい。

ダンス・リサイクルは、これまでとこれからに触れていながら、「いま・ここ」を大切にできる素敵な作品であった。次のダンス・リサイクルが回ってくる日を気長に待ちながら、私もサイクルし続けていきたい。



『ダンス・リサイクル』舞台写真

社会学部3年・桂波那（制作・演助）

今回は、制作・演助で参加させてもらった。また、1つの作品をリサーチから本番まで制作として全うするのは、初めてのことであった。本論は1つの作品における制作の側面から考察する。

リハーサルやリサーチ・ショーイング中、「制作の立ち位置」が非常に難しいと感じた。本座組では演者・スタッフが同じ目線でコミュニケーションを取る場面が多かったように思えた。だが一方で、制作の業務内容は見えづらく、演者やテクニカルスタッフと比べて評価しにくい（されにくい）ように感じる瞬間もあった。同時に、制作の「業務」と「雑務」の境

目もあやふやであるように思えた。実際に賃金が発生する経済活動では、制作はどのような業務や役割を果たし、演者や他のスタッフとどのような関係で作品が創られているのかが、今まで以上に興味深く感じるようになった。

今回参加させていただいて、制作という役割を捉え直す機会になった。また、リサーチからショーイングまで作品が創られていく場にいられたのは、非常に有意義な時間であった。

社会学部3年・原麻生実（照明）

スタッフで関わると、出演者や観客とはまた違った感覚で作品を見ることが出来るのだと改めて実感した。スタッフの視点ではダンサー達を輝かせるために多くのことを考えるし、舞台に立つ人間としては自分もやってみたいと考えさせられる。しかし、観客と同じ目線で出来上がった作品を見ると、彼らにしか作れなかったものばかりだと、彼らだからこそ作ることが出来たものなのだと実感させられる。

私が最も考えさせられ、もどかしさを感じたのは「罵倒ロワイヤル」と称した作中のワンシーンを見ている時だった。初めて見た際は、強い感情をぶつけ合う様子に戦慄した。自分には到底不可能だろうと感じた。しかし本番直前の頃には、自分も混ざりたいという欲が少しだけ生まれた。

不可能だと感じたのは何故なのか。当然、恐怖が一番大きな要因ではあったのだが、その中に「女」の自分にはできないという思いがあることに気が付いた。目の前の「男」と対峙した場合、表情に気圧されるだろうし、力の差にも驚くだろう。では「女」同士だとうなのだろうか。私は考えたくもなかった。大きな感情や大きな力を表に出すことに抵抗がある私は、きっと上手く出来ずに泣き出してしまうからだ。

私は今回の作品づくりに関わったことを嬉しく思っている。これからは私自身の殻を破るきっかけを

くれるような人達と作品づくりがしたい。そしていつか全員で「罵倒ロワイヤル」ができるように、胸を張って参加できるように成長していきたい。

社会学部4年・土田倭也（創作・出演）

このプロジェクトに参加して、何か自分の悩みや課題に向き合うことで動きに説得力が増すということに気づいた。自身が抱えている問題や不安、それが大きくても小さくてもそれらに対して向き合うことで、表現することの意味が生まれた瞬間を体験した。それに加え、動きが内蔵する意味の様なものを深く探る必要性を感じた。また、一緒に踊るダンサーや音、光も感じなければ独りよがりになるということにも気づかされた。

今回はショーイングという実験的な試みではあったが、その中で課題を見つけ取り組むことができるという発見があった。

社会学部4年・武内愛実（サウンドデザイン・音響）

今回のショーイングに音響スタッフとして関わり、最も印象に残っているのは「生音の凄さ」である。

私は中学の時に吹奏楽をしていて、生演奏の素晴らしさをととてもよく知っていたが、大学で音響のみに携わっていてすっかり忘れていたことに気付かされた。その場で出される音や演奏には、なにか生命力みたいなものを感じ、その中でもドラムは質量感もあってまっすぐ心に響いてくる感じがとても魅力的だった。ドラムを演奏された奥田さんの叩くドラムがダンサーの心にしっかり届いているのを見て羨ましく思った。生音に負けないように私も、ドラムを叩くみたいに音響のオペレーションが出来たらいいなと思った。プロジェクト自体はすごく楽しく、やっぱりダンス作品は自由に音のことを考えることが出来るところが、好きだ。



『ダンス・リサイクル』集合写真

■ショーイングを終えた教員の考察

ダンスをリサイクルするという学生たちとのリサーチは、作品はもちろんのこと、作品作りのプロセスの中で「何故かワクワクする瞬間」を共有しつつも個人個人の課題に向き合う時間でもあったように思う。また、ショーインにお越しいただいた 100 名余りの観客の方々と共に「いま・ここ」にいる者同士がダンスを通して時間と空間を共有出来たことにも感謝したい。

2-2. 『HIRAMIRU -ランウェイで踊ろうぜ-』

本プロジェクトは、衣装作りを出発点にゲームやアニメなど 2 次元と呼ばれる作品を 3 次元の舞台にのせてみるというプロジェクトである。大音楽室にランウェイを作り、ファッションショーという形態の中で、衣装を生かす動きとストーリー作りやキャラクター作りをリサーチし発表した。



HIRAMIRU

ランウェイで踊ろうぜ

構成・演出 | 松岡希美
ステージング | 関口晴

出演
杉山遼 松岡希美 奥庵之介
早坂健生 松岡結暖 吉田陽登 吉田蓮

スタッフ
音響 | 矢野なごみ 照明 | 亀井涼花 小林愛佳
制作 | 吉田陽登 衣装制作 | 大菊萌々香
演出補佐 | 松岡結暖 舞台監督 | 坂東仁実

協力 | 西国学院大学ボランティアサークル ホルネット・オンライン 今井真心人
西国学院大学パフォーマンス・アーツ研究所 (SIPA)

マダノリア・カフェとは
教員と学生が自主的に行う、セミナーやワークショップなどの課外活動。
マダノリア・カフェ『踊ろうぜ』では様々なテーマを、踊ることで「いま・ここ」にある
身体性を通して掘り下げていく。

ゲーム、アニメ、マンガ…いわゆる二次元と呼ばれる作品も
ドラマで使われるあの衣装も、舞台上で着るこの衣装にも
作り手の工夫がたくさん詰まっている。
その衣装は「デザイン(二次元)から衣装(三次元)」へと変化し完成する。
たった3着の衣装がランウェイという舞台で
ダンス的要素を取り込むことで何を表現できるのかをリサーチし、
ファッションショーとして発表する。

2024

11.16 STU

11.17 SUN

開演 14:20 (受付開始:開演は14:00)

場所 西国学院大学6号館5階 大音楽室
3階も入って右側、中音楽室の隣にある建物の2階です。
3階駐車場からは3号館ボランティアホールがご覧いただけます。

料金 無料(要予約)
予約開始日 10月13日(日)
オンラインチケットはこちら



■発表を終えた学生の考察

社会学部 3 年・松岡希美 (構成・演出)

今回、ファッション・ショーを初めて自ら企画した。本番の半年前から企画書を書き始め、衣装製作、ストーリー作り、キャラクター作りと進めていった。出演者と共に自分たちの興味のあるプリキュア、ドラクエ、ポケモンなどの要素を取り込みつつも、著作権を侵害しないように、試行錯誤した。そして、自身のアイデンティティや趣向を明確にすると同時に、好きなゲームやアニメの世界観から着想を得たファンタジー要素の強い 3 着のデザインを完成させた。

衣装を型紙から製作する中で一番難しかったことは、シンメトリーなデザインばかりに偏りが生じないように仕立てることだ。中古のドレスからリメイクしたものは、分解した後のウエストの位置を自分とは体型が違う出演者に合わせるのが難しかった。また、余裕を持って早めに作り始めたが、とても時間

がかかり 11 月の稽古終わりに作業をすることになってしまったので、次回衣装を製作する際は、短期間で集中的に作れるようにしたい。

時間に追われたのは衣装製作だけではない、演出についてもであった。ファンタジー、異世界といったアニメやゲームのような見せ方をしたいが、2 次元とは違い舞台は現実世界なのでアングルなどが変えられない。似たような見せ方にならないよう、ステージの関口くんらの力を借りながら、3 着の衣装がそれぞれ異なる雰囲気をもった演出を心掛けた。演出をする中で、私は考えているイメージを言葉にして伝える力が足りていないと気づいた。頭の中の構想を言語化する習慣を作り、練習する必要性を感じた。

そして、人と人の縁も貴重なものだ実感した。ボランティア・サークルのメンバーが当日運営を手伝ってくれたり、大学近くのカレー屋さん長谷川米穀店にちょうど取材に来ていた YouTuber のヤグタウンさんにもこの企画を宣伝して頂いた。今回のプロジェクトを通して、反省することも多いが、同時に感謝することも多かった。今回学んだことを忘れずに次回に生かしていこうと思う。

■ショーイングを観た教員の考察

本プロジェクトの試みは、普段は画面上で個人的な趣味として行うゲームや 1 人で観るアニメを、パフォーマンスというパブリックな行為に発展させることが出来るのかというリサーチであった様に思う。

松岡さんにとって初めての企画であった為、時間配分や学生間のコミュニケーションに手間取った様子ではあったが、助け合いながら最後までやり遂げたことにも価値があると思う。

また、会場内にはアニメ好き、ゲーム好きなのではという観客層が集まり、ゲームやアニメは普段 1 人で楽しむだけの個人的な行為だが、パフォーマンス

を観てそれに感化されたのか他者との会話が自然と生まれていたことにダンスの有用性を感じさせるプロジェクトであった。



『HIRAMIRU』集合写真

珈琲・ホビー・ハウス 第4章 自己と他者、孤独と寂しさ

担当教員：山中 雅大

「余暇」と「遊び」の概観

現代社会では、仕事や勉強をせずにいる人が「暇人」や「ニート」と揶揄されるように、往々にして「暇」であることは悪い事のように捉えられがちである。また「娯楽」も「暇」と同じように「無益なもの」と捉えられている。このような「勤勉は善」「遊びは悪」という実利主義的思考は、欧米を追い越すことを標榜した明治政府によって伝播されたものである。

そのようなイデオロギーの中で「余暇」は、仕事の循環に回帰することを目的や念頭に置いた「余暇善用論」の「レクリエーション」として扱われてきた。つまり「余暇」は仕事に従属し、より効率的に働くための時間や機会として利用されてきたのである。しかし本来「娯楽」は、仕事とは関係のない純粋な好奇心で学んだり、考えたりすることであった。つまり、「余暇」や「娯楽」が近代以降、仕事や学業、あるいは実生活において実用的で有用性の高い「教養」や「技能」として捉えられるか、「社会にとって役に立たない」生産性の低い「娯楽」として二極分化しているかのように捉えられたということになる。故に、本来の「自由な知的追究」としての「レジャー」が、不自由で限定的なものとなっている社会的現状がある。

本カフェは、以上の社会的背景から、学生の純然たる「遊び」や「娯楽」への興味関心、そして「自由な知的追究」を根幹に据えている。4年目も過年度と同様、主宰教員の主導ではなく、学生が主体的かつ積極的に実施・運営することを目的とした。（田中隆生）

カフェ名の由来と精神

本カフェの正式名称は「珈琲・ホビー・ハウス」と言い「コーヒー」の名を冠している。それ故、たまさか外部から「コーヒーやお茶を飲みながら、楽しく和

気あいあいと歓談しているのですか？」と問われることがある。しかし、本カフェでは、断じて「楽しいだけの活動」を実施しているわけではない。騒然たる甲論乙駁、あるいは怒号が飛び交う批判の嵐を巻き起こす熱烈な活動を展開している。そもそも、本カフェの名称は、17世紀から18世紀にかけて欧州で隆昌した「コーヒー・ハウス」が由来となっている。

「コーヒー・ハウス」は、人々が新聞やニュース情報を集めたり思想や意見の異なる者同士が政治や芸術を論じ合ったりするための公共空間であった。また「コーヒー・ハウス」で行われる議論には「論争的だが、礼儀正しく、学問的だが教訓的ではない」（井谷 2023:10）という特徴があった。本カフェで行われる喧々囂々、侃々諤々たる議論もこれらの特徴を持ち合わせることを目的としている。立場や環境、主義や思想、「推し」や愛好ジャンルが異なる者同士が、互いに忌憚のない意見を述べる。それらの主張は、荒唐無稽で中身の無い「否定」ではなく理路整然とした「建設的な批判」である。また、議題の答えは安易に出ず、むしろ正解や答えといったものが存在しないものである。それ故、本カフェでの議論は、個人の思想や意見を全員に押し付けるような説教や訓戒には陥らないようにしている。（田中隆生）

カフェ活動4年目のテーマ及び活動の利点と課題

本カフェは、毎年運営するにあたってのテーマが設けられている。2024年度のテーマは「自己と他者、孤独と寂しさ」である。ミード (2005) は、人間は「他者」の言動を模倣することによって「自己」を自覚していくと指摘した。つまり「自己」とは個人が生得的に所持しているものではなく「他者」の言動に影響を受け、それを模倣することによって形成されること

を示した。またアーレント（2017）は、1人である状態を「孤独」「寂しさ」という概念で区別した。「孤独」とは、何かを成し遂げるために必要な誰にも邪魔されない状態を指し、「寂しさ」とは、「他者」に囲まれていても1人であると感じてしまう状態を指す。つまり「孤独」は集中して物事に取り組むために重要な、望ましい「他者」との断絶状態である一方で、「寂しさ」は疎外感から「他者」に依存してしまう危険性がある。

本カフェでは、各メンバーが、主宰者をはじめとした様々な「他者」と関わり、言動を模倣しながら取り入れることで新たな「自己」を自覚し、より成長する機会を得ることが出来た。また、自身の興味関心をカフェの活動として実施するという目的のため、根気や労力、入念な準備と多角的検討を伴った「孤独」な状態での企画書作成によって「他者」に依存することのない、「望ましい1人の状態」を得ることが出来た。

一方、本カフェ内でも、活動の積極性や参加度の差異によって、メンバー間での親密度や関係性の差が見受けられた。そのため本カフェでは、そのような「寂しさ」を持ったメンバーに対しての配慮が充分なされておらず、結局はカフェ内で、親密な関係同士がグループ化されており「自己」と価値観の合う「他者」にしか目を向けられていないという課題が発露した。それにより、本カフェメンバー全員の自主性・主体性の欠落が発生し、今年度も、大幅に主宰者の援助や関与を必要としてしまった。

それでも、本カフェ発足以来の目的である、学生による主体的かつ積極的な実施・運営を目指し、前年度よりもメンバーの自主性・主体性を促進するように工夫した。その例として今年度は、例年主宰者が執筆していた本稿を、学生だけで執筆するようにした。この取り組みは、カフェ活動を学生自身で振り返り、課題や反省点を分析し、次につなげるための一助とすることができるだろう。これからも、学生の主体的か

つ積極的なカフェ運営によって、旧来の「コーヒー・ハウス」に見るような、様々な「他者」を巻き込んだ公共的議論の場を創出し「趣味」や「娯楽」を客観的に、そして協同的に、時に反駁・批判をし合いながら共有し追究していきたい。

2024年度の活動実態や評価については、以下からのメンバーによる報告を参照されたい。

2024年度の企画に関するアンケート結果と傾向

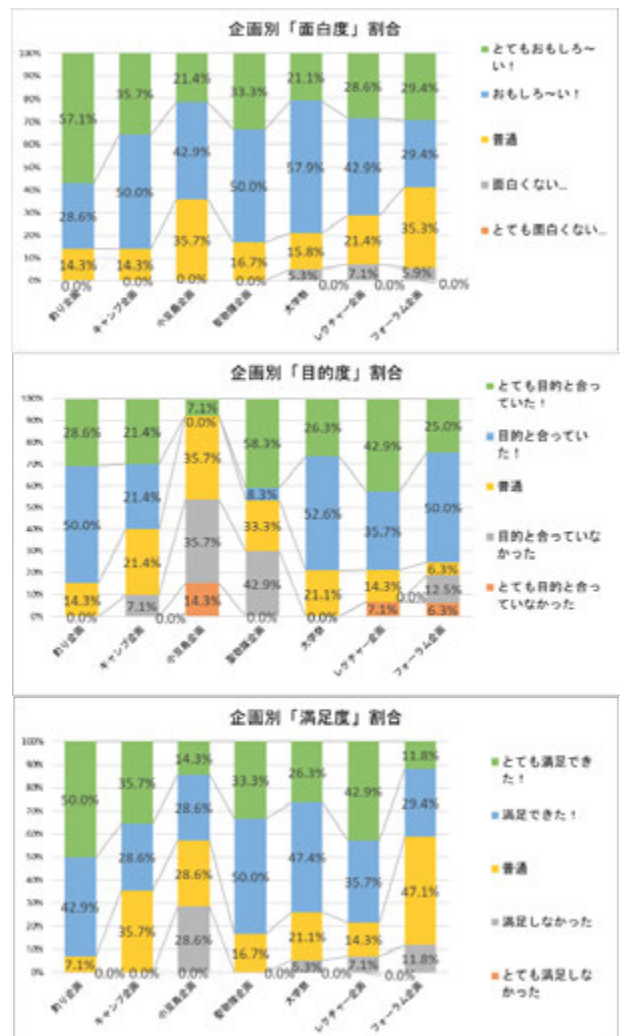


図1 企画参加者の意識調査

今年度は、各企画終了時に企画参加者と企画者の両者に対して、Googleフォームを活用してアンケートを実施した。企画参加者には、各企画の「面白度」「理解度」「目的度」「準備度」「満足度」「脱退度」をそれぞれ5件法で評価してもらった。図1は、それをグ

ラフ化したものである。本レポートでは紙面の都合上、特に「面白度」「目的度」「満足度」を取り上げることにする（残りのグラフに関しては、本カフェのInstagram内に掲載するので、本レポート末尾にあるQRコードから是非とも参照されたい。そして、フォローしていただきたい）。

「面白度」「満足度」は「釣り企画」が57.1%、50.0%で1位、「目的度」は「聖歌隊企画」が58.3%で1位であった。

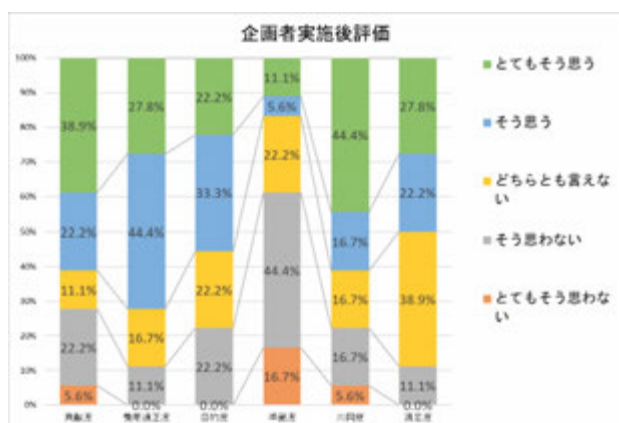


図2 企画者の意識調査

企画者には、自身が実施した企画の反省点を「貢献度」「費用適正度」「目的度」「準備度」「共同度」「満足度」の項目について5件法で評価してもらった。図2は、それをグラフ化したものである。

企画者延べ18人回答の内、各項目の中で「共同度」が44.4%と最も評価が高い一方で、「準備度」が16.7%と最も評価が低いことが分かった。このことから、企画者は、共同企画者の働きぶりに対する満足度が高く、互いに頼り合いすぎることによって、企画全体としての準備・段取りが疎かになってしまうという傾向があることがわかった。

また、以下に、カフェ1年生による本カフェの活動を通しての感想と、今年卒業する4年生によるカフェ活動全体の総括を掲載する。（田中隆生）

ゆるく包まれる空間

1年生かつ通学時間の都合上あまり高頻度ではな

く手探りで参加にはなったが、参加したどの企画も楽しく、普段は得られないような学びを得ることができた。特に印象に残っているのは飯テロ企画（大学祭前日企画）だ。私は人と一緒に食事をするのが苦手だが、この時はあまり気にせずに「共食」をすることができた。それについて「何故だろう？」と考えてみたところ、「人と人との間の壁が少ないのでは？」と思いついた。確かに、普段もカフェメンバーがお互いゆるく関わっている。このような人間関係は中高生時代には無く、新しいと思うと共に、小学生時代のように懐かしいとも感じた。

このカフェの存在は、慣れない環境で不安だろう新1年生たちに是非オススメしたい。きっと大学生活の助けにもなるだろう。（山田小晴）



大学祭前日企画（10月12日）

終劇～このカフェで出会った仲間との経験を胸に～

私を含めた4回生は本カフェに対して好感を抱いている。その主な理由として、今回は2つ挙げる。

1つは企画書作成や実行を通して、「やりたいことを実現する力」を得たからだ。企画に関して私と同じ4年生の森本と小川に話を聞いた。

企画会議に参加した小川は「長文の企画書には改善が必要だが、企画者が共に企画を作り上げる楽しさや、企画の不備を補い高度な企画書を作る経験となった。他の人の意見を聞き新たな視点に気づけた。参加者として企画者の『やりたいことを実現する力』

を共に培うことができた」と話す。また、キャンプ企画を実行した森本は「リスクマネジメントを怠った事でトラブルが多く、やりたいことを実現するまでの大変さを痛感した。しかしこの経験から『やりたいことを実現する力』を得ることができたと思っている。参加者の『また実施したい!』と言う言葉が企画実行の達成感につながった」と話す。

もう1つは大切な仲間が存在を得たことだ。近年の日本社会における友達関係は、相手を気遣い本音を伝えられない「優しい関係」が浸透している。だがこのカフェは感情的な喧嘩をする分、互いの本音や思いに気づき、本当に困った時や辛い時に助け合える関係性が構築できたと考える。

思い起こせば、カフェでの4年間はあっという間だった。カフェの仲間と時には泣き、時には笑った。4年生にとってそれは大切な思い出である。最後に僭越ながら4年生からの謝辞を述べたい。

このカフェで共に議論し学び合えたカフェの後輩へ、このカフェを温かく見守り支えて下さった諸先生及び職員の方々、何よりこのカフェに多大なる時間を割いて「やさしいきびしさ」を与えてくださった主宰者である山中雅大先生に……ありがとう、大学生活に、さようなら、そして全てのシコガクチルドレンにおめでとう。(星月アウラ=大野亜里沙)

参考文献

- ・井谷善恵, 2023, 「17～18 世紀におけるイギリスのコーヒー・ハウス」, 珈琲店経営情報誌『珈琲と文化』No.130, 6-17.
- ・ジョージ・ハーバード・ミード著, 稲葉三千夫, 滝沢正樹, 中野収訳, 2005, 『精神・自己・社会』青木書店.
- ・ハンナ・アーレント著, 大久保和郎・大島かおり訳, 2017, 『全体主義の起源 3 全体主義 新版』みすず書房.

珈琲・ホビー・ハウス 4」カフェレポート編集班

編集長・記事：田中隆生

記事：山田小晴

寄稿：大野亜里沙・小川優太

森本凌丞

カレンダー作成：井上未結

校正・校閲：山中雅大



Special Thanks：熟読してくれた「あなた」★

2024年度 珈琲・ホビー・ハウス4 活動カレンダー						
実施日	会場・企画・活動内容	※(以)組織・企画代表者	立派企画協賛・同好会協賛 or 協賛企画 or 電子	※(以)企画代表者	参加人数	
5月29日	カフェ説明会 (山中)	エグザ・確実 (山中)			20	
5月31日	大学祭後援会 (長尾)				15	
6月14日	春学期定期企画会議【1週目】	釣り・引き (森本)	レクチャー・引き (大野)		21	
6月21日	春学期定期企画会議【2週目】	レクチャー・確実 (大野)			13	
8月30日	レクチャー企画【1回目】 (大野)				16	
	大学祭試作会① (森本)				13	
	レクチャー企画【2回目】 (大野)				14	
9月6日	秋学期定期企画会議【1週目】	アスレチック・引き (森本)	アイススケート・引き (大野)		16	
9月13日	秋学期定期企画会議【2週目】	絵画・確実 (大野)			10	
	レクチャー企画【3回目】 (大野)				15	
9月21日	臨時企画会議①【1週目】	釣り・引き (森本)	高知・引き (河原)	小豆島・引き (森本)	12	キャンプ・引き (森本)
9月27日	臨時企画会議②【1週目】	5/26大学祭後援会・電子 (森本)	書を採る・引き (森本)		13	
	なんの会議なん? 会議 (吉田)				12	
9月30日	大学祭後援会 (森本)				14	
10月4日	代表者会議【第1回】 (長尾)				10	
10月9日	臨時企画会議③【1週目】	小豆島・確実 (森本)	キャンプ・確実 (森本)	10/9大学祭後援会・電子 (森本)	13	
10月11日	大学祭企画・狂乱の前夜祭 (森本)				15	
10月12日	大学祭企画・鬼畜の準備日 (森本)				17	
10月13日	大学祭企画・社畜の本祭日 (森本)				16	
10月16日	臨時企画会議④【2週目】	小豆島・確実 (森本)			12	
10月31日	臨時企画会議⑤【1週目】	プロジェクト・引き (森本)	聖歌隊・引き (森本)	プレゼンター・引き (河原)	14	
11月7日	臨時企画会議⑥【2週目】	プレゼンター・引き (河原)	聖歌隊・確実 (森本)		15	
	釣り企画・レクチャー編 (森本)				13	
11月10日	釣り企画・実施編 (森本)				13	
11月25日	小豆島企画・映画視聴 (岩佐)	11/25フォーラム企画・電子 (森本)			13	
	キャンプ企画・レクチャー (井上)				11	
11月28日	小豆島企画・1日目 (岩佐)				15	
	キャンプ企画・1日目 (井上)				15	
11月29日	キャンプ企画・2日目 (井上)				15	
	小豆島企画・2日目 (岩佐)				15	
12月3日	聖歌隊企画・レクチャー編 (加藤)				20	
12月5日	フォーラム大作戦会議 (田中)				16	
12月9日	聖歌隊企画・全体練習編 (加藤)				16	
12月11日	聖歌隊企画・リハーサル編 (加藤)				18	
12月11日～12月13日	聖歌隊企画・個人練習編 (加藤)				18	
12月13日	聖歌隊企画・本番編 (加藤)				15	
12月17日	冬学期定期企画会議【1週目】	1/2フォーラム企画・電子 (森本)	高知・引き (河原)		12	
1月6日～2月7日	フォーラム撮影会 (長尾)				16	
1月10日	冬学期定期企画会議【2週目】	アイススケート・引き (森本)	高知・確実 (河原)		12	
2月14日	臨時企画会議⑦【1週目】				?	
2月21日	高知企画・説明編 (河原)				?	
3月2日～3月3日	高知企画・お泊り編 (河原)				?	

※2025年1月末時点において、2024年度の本カフェ活動は、計17企画(内、企画8企画/企画574人の参加人数、約133時間)であった



↑アンケート結果の詳細はこちら



↑過去の活動内容はこちら



↑公式 LINE はこちら

ポストモダン学校カフェ

担当教員：浜田 知美

森川 由美

活動の理念

20世紀末からの社会変化に応答し、近代学校教育からポストモダン学校教育への転換をはかる学習指導要領が日本の学校に導入されて5年余りとなる。さらに、「令和の日本型学校教育」で要請される学校や教師は、児童生徒の「個別最適な学びと協働的な学び」が実現される場所であり、「主体的な学びを支援する伴走者」である。その一方で、2022年9月には国連障害者権利委員会が日本政府に対し、障害を持つ子どもが分離した特別支援教育ではなく、通常学校でインクルーシブ教育を受けることすすめる勧告を出した。このような背景のもと、インクルーシブな学びが可能な学校の実現が模索され、「チームとしての学校」の在り方が問われている。

学校教員やスクールソーシャルワーカー（SSW）を志望する学生がこれらの職についていた際、子どもに対するインクルーシブな学びの実践や、その実践を行うための同僚や学校外の大人との協働に直面する。そこで、本カフェでは「インクルーシブな学びが可能な学校」に焦点をあて、2024年度の活動の「2つの問い」として以下を設定した。(1) ポストモダン社会におけるインクルーシブな学びが可能な学校では、教員やSSWがどのように子どもに伴走するのか。(2) そのような伴走のために、教員やスクールソーシャルワーカー（SSW）などの大人間ではどのようなコミュニケーションが必要なのか。

2024年度は本カフェの名称を「ポストモダン教職カフェ」から「ポストモダン学校カフェ」へ名称変更し、教職だけでなく学校に関わる専門職に関心のある学生とともにこの2つの問いをもとに「インクルーシブな学びが可能な学校」を考えた。（森川由美）

活動の報告

今年度は現職の教育関係者と学んだチャーリーワークショップを活動の中心に置きながら、動画・映画鑑賞から考える、教育実習から考えるという2種類の活動も行った。準備や振り返りを重視し、活動回数は23回（2024年1月末現在）に及んだ。以下では、まず、2回（各2日間）開催したチャーリーワークショップの報告を行い、次にそれ以外の2種類の活動報告を行う。その後、2024年度の活動を通してみてきた学生たちの「2つの問いに対する私たちの考え」を掲載する。

ワークショップで現職の教育関係者と学ぶ

チャーリーワークショップは、映画『みんなの学校』の舞台となった大阪市立大空小学校の初代校長の木村泰子氏と元教員の塚根洋子氏をファシリテーターとして「みんなの学校の創りかた」を学び合う場である。本ワークショップは、2017年度の本学大学院社会福祉学研究科の講義が基になり、開催されるようになった。その後、2020年度に受講生が「みんなのCafé」を形成して運営を行ってきた。本年度は本カフェがみんなのCaféと協働して5月11・12日と11月22・23日の2回開催した。11月のワークショップでは、JRの事



チャーリーワークショップ（5月11・12日）



チャーリーワークショップ・夜の部（5月11日）

故によって、木村さんと塚根さんの到着が2時間遅れた。それがワークショップの流れに影響したのか、学生が参加を重ねて見えてきたのか、チャーリーワークショップに関して様々な意見が出された。（浜田知美）

全体での話し合いでもグループワークでも同調圧力が発生しやすく、議論が煮詰まらず話が脱線しやすかった。話が脱線した場合は、それに流されないよう自分の意見に自信をもつことが重要だと気づいた。様々な職の参加者がいるので、現代の学校教育の課題について様々な視点から発言がされて、一人一人できることを煮詰めることを期待したが、回を追うごとにそれができなくなっているように思え残念だった。（文学部4年・木元大翔）

子どもたちが社会に出た後のことも見ていく必要があるという点を知ることができた。また、実際に困っている子たちの意見を自分の中に取り入れることができた。だが、グループワークでは話が最初から脱線してしまっていたため、初めにテーマを確認してテーマに沿ってどれだけ話を詰められるか意識する必要があることが分かった。（文学部4年・坂東拓海）

学校関係者だけではなく、経営者や不登校支援をされている方など、普段の学生生活では関わることの少ない人たちと意見が交わってよかった。泰子さ

んの考えが絶対のような雰囲気はあったと思う。大空小学校の場合は、実現できたこともたくさんあるかもしれないが、他の小学校や中学校となった場合に実現できるのかという疑問は残った。

（社会福祉学部4年・吉崎晴）

学生の良い意見を拾い上げられなかったことが司会として悔しかった。誰かが話したときに論点がずれたり、長くなっていったときにうまく抑えるスキルが司会に必要だと実感した。前回、前々回は最初の議題から最終的なまとめへ道筋がみられたが、今回はあっちこっちに動いて（日本の公教育制度、子どもの権利条約、インクルーシブ教育、学校教育に対する大人の失敗等）、論点がわかりにくかった。

（文学部3年・江口裕汰）

「教員」をはじめ教育に関わる者は、子どものどこまでに責任をもったらよいのか、と考えさせられた。「化石」な人のことで盛り上がり、違和感を覚えた。誰でも「化石」になる可能性があるという話を伺ったが、それでも納得できない。「化石」な人たちは、排除・関わらない方がいいという雰囲気が感じ取れた。「対話」が重要だと言っているのに、「対話」するつもりが最初からないのではないのか？と思った。

（社会学部3年・高田樹希）



チャーリーワークショップ（11月22・23日）

泰子さんをはじめ、色んな立場の参加者さん達から実際にお話をきき皆で考えたり、各自の体験談が話せたり等とても参考になった上、視野が広がって教育についての理解が深まった。一方で、意見の固定化や発言のしにくさ等、良さではない部分も見えてきた。今後はワークショップの改善策も含めて皆で話し合えるようになると、更に良いものとなるように思う。
(社会福祉学部3年・村上千有理)



チャーリーワークショップは今回が初めての参加であったため、どういった人が参加をしているのか、泰子さんがどういったことをお話しになるのか、について重点を置いていた。子どもの人権問題についての話題で、不登校や障がいを持った生徒への対応・支援を今後どのようにするべきかを改めて考えるキッカケになったと思う。
(文学部2年・小林聖海)



動画・映画から考える

東京都千代田区立麹町中学校の動画と同校元校長の対談番組（5月17日）、TV上映版「みんなの学校」（5月11日、11月22日）、映画「こどもかいぎ」（大学祭）を視聴した。

大学祭（10月13日）では、「対話とは？」と題して映画「こどもかいぎ」を上映した。前日に本カフェメンバーで試写を行い、「対話」について考えた。大学

大学祭での映画上映（10月13日）

祭当日は、午前と午後の2回上映し、鑑賞者人数は合計23名（本学生14人、学外9人：本カフェメンバー除く）だった。卒業生も駆けつけてくれ、映画上映後に中学校現場における教員経験を伝えてくれた。



TV番組録画鑑賞（5月17日）

この映画は、子どもたちが一週間に一度「かいぎ」をする保育園を1年間に渡って撮影したドキュメンタリーである。映画の序盤では、子どもたちが「かいぎ」に集中し続けることができず飽きてしまって遊んでいる子もいたが、場面が進むにつれて集中できていた。子どもたちがそれぞれ自分の意見を話せるようになっていくのを見て、子どもは成長が速いということを実感した。また、教育次第で子どもの成長は無限大であると学んだ。
(文学部2年・楠真太朗)

映画のテーマで出てくる「対話」という意味について改めて深く考えさせられた。自分の思いを言葉に

して「対話」する子どもたちの日常は、大人たちにコミュニケーションの原点を気づかせてくれた。先生方も放任や放置ではなく、適度な距離を持ちながら子どもたちに接していた。子どもとの接し方について今一度、確認できる良い機会になった。

(文学部3年・加藤唯)

教育実習から考える

中学校で教育実習を終えたばかりの4年生（6月18日：岩田花苗さん、小川峻太さん、6月25日：木元大翔さん、野口拓海さん、坂東拓海さん）から教育実習の話をうかがい、チャリーワークショップや動画の内容と関連づけて中学校におけるインクルーシブな学びについて考えた。

教科の用語などを既に知っている大学生に模擬授業をするのと、これから学ぶ小学生や中学生に教える実際の授業とでは授業の難しさが違うことを学んだ。生徒との接し方や実習先で困ったことを知れて勉強になる会だった。実習に向けて自分に足りないものが分かった。

(文学部3年・曾我部みれ)



教育実習報告会（6月18・25日）

2つの問いに対する私たちの考え

「ポストモダン」といえば、「モダン焼き」というお好み焼きがあるが、これは従来のお好み焼きに焼

きそばを載せるなどのアレンジを施したものである（なお、「モダン」の意味は違う）。同じように、子どもたちとの接し方も、従来の考え方と新しい考え方のコンビネーションを志向していくべきである。「インクルーシブ」を目指すために、様々な考え方に寛容になる必要がある。従来のお好み焼きにこだわるばかりでは、「モダン焼き」は成立しない。一方で、従来のお好み焼きを尊重できなければ、美味しい「モダン焼き」はできない。従来の考え方と新しい考え方の合間に生まれるものが「インクルーシブな学び」ではないかと思う。

(文学部4年・野口拓海)

各メンバーから集まったこのような考えを、マグノリア・カフェ・フォーラムの動画編集長を務めた小松千紘さん（文学部3年）が、本年度本カフェの「2つの問い」への応答として以下のようにまとめた。

(1) ポストモダン社会におけるインクルーシブな学びが可能な学校では、教員やSSWがどのように子どもに伴走するのか。

- ・生徒一人ひとりのニーズに合う教育を行うため、専門知識の向上と経験値を増やし、生徒一人ひとりを知る。
- ・少子高齢化の時代だからこそ、子どもを地域全体の宝と考え、みんなで支えていく。
- ・常に疑いの心を持ち歴史や伝統にとらわれず今を生きる子どものための最適解を見つける。また、そこで終わりではなく、その時の最適解を常に探し続ける。

(2) そのような伴走のために、教員やSSWなどの大人間ではどのようなコミュニケーションが必要なのか。

- ・多様な職種の方と協力し、自分と意見が違う場合でも受け止めてみる。
- ・学年だけでなく学校全体で生徒についての情報共有をする。
- ・地域における対話はあきらめない。

日韓文化コラボ

担当教員：李 静淑

わたしたちの活動

映画、音楽、ファッション、スポーツなどグローバル化で境界が崩れつつある。韓国ブームにロマンを感じても、その裏側にやはり日本と韓国とは相当違うのだという日本人の伝統的な韓国観が残っているように感じる。

この心理的ミゾを感情的議論にしないために、一定の距離をおいて話そうとすると、かえってお互いの心理的距離が拡大する。双方の信頼関係を築くためには、例え、言い争ってでも話し合い、小さな差異は認め合って、その上で共通の認識を持ち合うことが、結局は心理的距離を縮めることに繋がるであろう。

まず身近な現状を認識し、考察する。距離的に近いことから風習など似ているところもあるが、微妙な違いもある。多少の差異を乗り越えて、大局的な見解を相互に持つことが肝要である。このマグノリア・カフェがささやかでも、お互いの理解に近づくための一歩になることを強く願っている。

日本と韓国は、「近くて遠い国」と言われているのは何故なのか、「近くて近い国」にするには何が必要なのかを考えるためにも、まず、戦前の歴史観から解放され、お互いに独立国同志の尊厳と理解が最優先されなければならない。

しかし、日本では似て非なるものへの嫌悪感と昔の優越感が未だに残っているように思う。そして経済的に対等になった今もお互い自らと区別したい気分があるように感じる。また、韓国は歴史問題を提起し続けるのは「近い」ゆえに自らを日本とは差別化したいところがあるからではないだろうか。

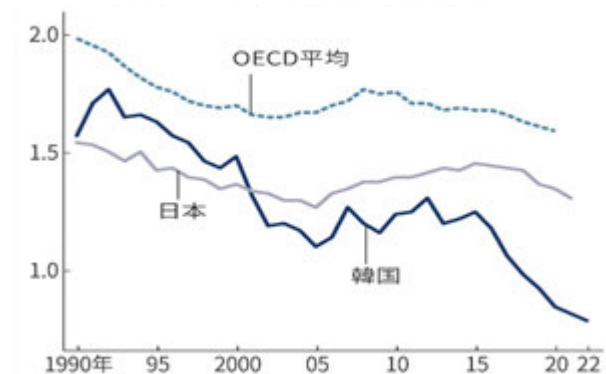
上記を踏まえて、現在の日本と韓国の社会、文化をはじめ、様々な分野を比較しながら、両国の友好な関

係づくりを深めるコラボ（コラボレーション）を目指したい。



韓国の「超少子化社会」の諸課題

近年、韓国では少子化が深刻な社会問題となっており、一人の女性が生涯に産む子どもの人数を示した合計特殊出生率は0.72（2023年）である。どうして韓国はそのような状況に置かれているのか。



合計特殊出生率推移の比較

日本でも少子化が懸念されているが、韓国の少子化はかなり深刻な状況である。OECD加盟国の中でも合計特殊出生率1.00を切ったのは韓国のみである。

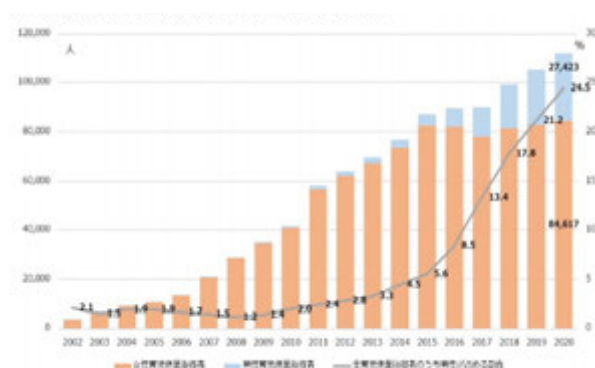
韓国の少子化が進んだ原因は、大きく次の4つが挙げられる。1つ目は、失業・雇用不安定による経済的な困難である。韓国の失業率は高い。学歴重視社会で大学に通うために高額な費用がかかるのに対して、就業率は低く、投資に見合うリターンが得られない。その経済的状況が生活の不安材料になり、晩婚化や未婚化に繋がっている。

2つ目は、韓国の教育至上主義の影響である。韓国では学校などの公教育費だけでなく、塾や習い事などの私教育費にける金額が大きい。それに学歴が社会的地位を左右するといっても過言ではないので、経済的にも精神的にも子育てへの不安を抱いている人が少なくない。

3つ目は、女性の仕事と家庭の両立の難しさである。職場の育児休暇制度が整っていなかったり、周りの理解が不十分だったりする理由から、仕事のキャリアを継続したいという希望が強い女性は結婚を諦める傾向がある。

4つ目は、女性の結婚や出産への意識の変化である。韓国は女性が家事や育児をして当たり前だという儒教的な考えが未だに残っているが、この伝統的な性別役割分業に対して女性の意識が変わり、少子化に影響していると考えられる。

韓国では2000年以降少子化が社会問題として浮上し、人口を増やすための政策が度々改正されたり、大統領が変わるたび様々な対策が行われたりしているが、少子化の改善がみられない状況である。



育児取得者のうち男性が占める割合

しかし、韓国男性の育児休暇取得率は2002年では、たったの2.1%だったが、「パパ育児休暇ボーナス」という制度が新設されてから2021年には26.3%まで上昇した。

この制度は、同じ子どもを対象に2回目に育児休

暇を取得する親に最初の3か月間、賃金の100%を支給するもので、育児休暇を取得しても高い給与が保障されるため、中小企業で働いている子育て男性を中心に、この制度が上手く活用され、効果が出ている。

上述した通り、韓国の少子化原因は様々である。結婚することが絶対に幸せになれるという考え方を持つ人は減ってきているように感じる。

また、結婚に対してポジティブなイメージを持っていない若者が日韓ともに増えてきている中で、少子化が少しでも改善していくためにも、これから子どもを持つと考えている家庭には、国をはじめ企業も積極的に支援していくべきであろう。

(社会学部3年・鴨田七海)

日韓・博物館比較試論

人類がこれまで遺してきた足跡を確かに記録し、展示する施設、それが「博物館」である。ここでは、日韓の博物館事情を比較検討し、両国の博物館には、どのような共通点と相違点があるのかを博物館の具体例や関連データを提示しながら考えていく。

日韓の博物館のデータを検討する前に、両国が「博物館」という概念をどう捉えているのか、まず博物館に関連する法律の条文を比較してみたい。

日本の場合は、「博物館法」第2条に「教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために」と、博物館は業務を行うものとされている。

一方、韓国の「博物館及び美術館振興法」第2条1項には「文化・芸術・学問の発展と一般公衆の文化享有及び生涯教育増進に資するために」と、記している。

このように日韓を比較してみると、日本の条文には、基本的かつ抽象的な文言に留まっている印象を

受けたことに対して、韓国の条文には、もう一步踏み込んだ具体的な方針や目標を示す姿勢が伺える。つまり、両国の文化政策に対する取り組みの違いが現れているといえよう。

上述した「日韓両国の文化政策に対する姿勢の違い」という点は、日韓両国の博物館の入場料を比較してみても分かる。日本の場合は、東京国立博物館を例にとると、常設展示のみでも観覧に 1,000 円が必要となる。



東京国立博物館の外観（筆者撮影）

一方で、韓国・ソウルの国立中央博物館では、常設展示館と子ども博物館、および無料特別展の入場料が無料である。これは、韓国の他の国立博物館でも同様であり、入場料が基本的に必要となる日本の博物館とは大きく違う点である。こうした点が、博物館を利用する上での経済的、心理的ハードルの違いを生んでいる可能性は否めない。



国立中央博物館の外観

さて、ここからは、日韓の主要な博物館の入場者数を比較するために、イギリスの美術メディアである *THE ART NEWSPAPER* が発表した、“The 100 most popular art museums in the world—blockbusters, bots and bounce-backs”という記事内のデータを参照したい。

タイトルの通り、これは世界で人気のある 100 の美術館を来場者数順にまとめた記事であり、主に絵画作品などを取り扱う博物館や美術館をランキングの対象としている。

1 位にはフランスのルーブル美術館、3 位にはイギリスの大英博物館など、世界的に有名な博物館や美術館が上位に名を連ねる中、6 位に入ったのが韓国・ソウルに所在する国立中央博物館であった。

この韓国の国立中央博物館は、2023 年に約 418 万人の来場者数を記録しており、入場料は基本的に無料であるという入口の広さが、この数字に繋がっていることは想像に難しくない。

これに対して、日本の博物館・美術館では、東京の国立新美術館が約 225 万人で、21 位にランクインしており、日本ではこの美術館が最上位となっている。

この国立新美術館は特殊な美術館であり、開催している展覧会によって入場料が異なるため、入場料と入場者数の関連性を一概に論じることはできない。ただ、国立新美術館は無料の企画展や公募展が何度も開催しているため、そうした点が入場者数に影響している可能性は考えられる。

そもそも、博物館に関わる世界的な組織である ICOM（国際博物館会議）が定めた博物館の定義の中にも「博物館は、社会に奉仕する非営利の常設機関」と、記されているように博物館は営利目的で設置されるものではない。しかし、国ごとの文化政策の違いによって、博物館に営利活動を強いることになる場合もある。こうした点は、今回、日韓博物館

の比較によって、初めて見えてくるものであろう。

冒頭に述べたように、博物館は人類の足跡を確かに残す重要な施設である。それがより良い形で活用されるためにも、日韓両国、特に日本の行政には、博物館へのより一層のバックアップが今後なされることを願って、本稿の締めとしたい。

(文学部3年・森田大翔)

画像の出典

- ・「韓国の出生率、2022年は過去最低の0.78 OECDで最下位」各国統計, <https://www.nikkei.com/article>.
- ・「育休取得者のうち男性が占める割合」雇用労働部（雇用保険DB資料）から筆者作成.
- ・「国立中央博物館とソウルタワー」
<https://upload.wikimedia.org/wikipedia>.

参考文献

- ・春木育美, 2020, 『韓国社会の現状—超少子化、貧困・孤立化、デジタル化—』中央公論新社/
- ・時論公論, NHK, 「出生率0.78 韓国の少子化対策はなぜ失敗したのか」 <https://www.nhk.jp>.
- ・「韓国で男性の育児休業取得率が増加、その理由は何？」 <https://www.nli-research.co.jp>.
- ・「博物館法」 <https://elaws.e-gov.go.jp/document>.
- ・宇仁義和, 「韓国の博物館および美術館振興法 | 地方における生涯教育で学芸員制度が果たしてきた機能と役割の検証—韓国との比較から」 <https://nodaiweb.university.jp>.
- ・「The 100 most popular art museums in the world—blockbusters, bots and bounce-backs」 *THE ART NEWSPAPER*, <https://www.theartnewspaper.com>.
- ・国立新美術館, 「展覧会・イベント」 https://www.nact.jp/exhibition_and_event.
- ・文化庁 博物館総合サイト, 「博物館について」 <https://museum.bunka.go.jp/museum>.



5号館の演習室にてディスカッション
(2024年5月28日)

Barefoot

担当教員：ネルソン橋本 ジョシュア諒

活動の理念～現代社会における〈宗教〉～

20世紀に入ると、社会における〈宗教〉の変化に着目した研究が盛んになった。その中で〈世俗化論〉が謳われ、近代化の進展とともに〈宗教〉が衰退すると予想された。しかし、21世紀の現状を見渡せば、〈宗教〉の影響は依然として強く残っている。近代化や合理化が〈宗教〉を打ち消すことはできなかったのだ。確かに、20世紀後半の欧米諸国においては、実証的データに基づく人々の「教会離れ」が確認されている。しかし、〈世俗化論〉だけでは説明しきれない事象も生じている。例えば、1970年代後半にはイランでのイスラム革命、米国におけるモラル・マジョリティの台頭など、〈宗教〉が〈公〉の領域へ影響を及ぼす動きが顕著になった（日本社会学会社会学辞典刊行委員会編 2010:538-541）。また、最近の国際情勢に目を向けると、トランプ現象を支えるキリスト教ナショナリズム、自民党と旧統一教会の関係、宗教シオニズムとパレスチナ問題など、〈宗教〉が社会や政治に与える影響は無視できない。こうした背景からも、今日の世界を理解する上で、宗教に関する一定の知識が不可欠であることがわかる。

また、宗教の〈私事化・個人化〉という視点も、現代の宗教を考察する上で欠かせない。日本はその代表的な事例を提供している。1970年代、世界各国で宗教と政治が深く結びつく一方で、日本では〈精神世界〉や〈ニューエイジ〉といったジャンルの書籍が書店に並び、個人の選択のもとで宗教的な事柄が〈消費〉される傾向が強まった。そして2000年代に入るとパワースポット・ブームが到来し、特定の場所が〈ふんわり〉としたスピリチュアリティという言葉と結びつき、〈観光化〉されていった（岡本 2023:54-61）。現代においては、個人の自由や〈消費〉の視点を抜き

にして〈宗教〉を語ることは、もはや難しくなっている。

世界各地でも、近年〈信仰なき巡礼者〉と呼ばれる、特定の伝統宗教に属さない観光客の増加が指摘されている（岡本 2015:20）。従来、〈聖地〉を訪れるのは熱心な信仰者に限られると考えられてきたが、今日では〈信仰なき巡礼者〉が〈聖なる〉旅に参加することも珍しくなくなった。こうした宗教と観光の結びつきは、現代社会において新たな意味を持ち、本カフェの活動にとっても重要な入り口となっている。



第1回目のランチミーティング（2024年6月6日）

〈Barefoot〉[裸足]で歩く試み

さて、旧約聖書の有名なエピソードを紹介したい。古代イスラエルの偉大なリーダー、モーセが〈神〉と出会う場面だ。ある日、モーセは山で燃え続ける柴の中から〈神〉の声を聴く。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」（出エジプト記3章5節）。

本カフェでは、私たちの身近にある〈聖なる場所〉を訪れることを目的の1つとしている。それは、場所やそこに暮らす人との出会いが、現代社会における〈宗教〉のあり方を考察するきっかけを与えてくれるからだ。アメリカでは、2001年の同時多発テロ事件

以降、イスラム教への偏見と嫌悪感が広がり、その対応策の1つとして〈宗教リテラシー〉の必要性が唱えられるようになった(Seiple and Hoover eds. 2002:6)。近年、日本でも〈宗教リテラシー〉や〈宗教的センス〉を促す取り組みが進められている。宗教学者であり住職でもある釈徹宗氏は、毎日新聞の企画で日本社会の宗教的な場を巡るルポを終えた後、次のような問題提起を行った。「今回いろんな宗教者や信仰を持った人たちが集う場へと足を運び、お話をうかがってきましたが、やっぱり手探りなんです(中略)こういう際に必要なのは宗教的センスだなと実感します。いまはもう、近所に異質の信仰を持って異なる生活様式を大切にしている人が暮らす社会であることを自覚しないと、無意識のうちにその人たちを傷つけてしまう。」(釈 2018 : 281-282)。



高山右近祭にて、酒井補佐司教と(2024年7月7日)

本カフェでは、このような試みに倣い、「異なる生活様式」に意識を向けるアプローチを模索してきた。私は、これを〈Barefoot〉アプローチと呼んでいる。モーセが「聖なる土地」に立ち入る前に〈素足〉になることを求められたように、〈聖なる空間〉に足を踏み入れたり、他者と向き合う際には、〈素足〉になり、敏感さと畏敬の念を持って接する姿勢が大切だと考える。〈素足〉になることで、地面の感触を直接味わ

い、〈身体〉を通してその場の雰囲気をもより深く体験することができる。また、〈素足〉であるからこそ、他者の靴を履く可能性も開かれ、〈共感〉への意識が高まる。つまり、〈Barefoot〉アプローチとは、様々な靴を履いて歩きながら、鋭い観察を行い、対話を重ね、それぞれの土地柄に接近し、〈聖なるもの〉との交流を目指す試みである。

主な活動記録一覧

日程	活動内容と場所
6月6日	ランチミーティング@長谷川米穀店
7月7日	フィールドワーク① 「高山右近祭」@カトリック小豆島教会
9月24日	日本キリスト教団屋島教会の關橋賢先生の講演@711教室
10月20日	フィールドワーク② キリシタン史跡めぐり 第一弾@小豆島
10月31日	ラーニングデザイナーの芦田加奈さんによるワークショップ@525教室
11月1日	フィールドワーク③ 「森の学校みつけ」見学@徳島県上山町
11月24日	フィールドワーク④ 大島青松園と霊交会
2月1日	共同教育研究 合同フィールドワーク キリシタン史跡めぐり 第二弾@小豆島
2月24日	「殉教血史 日本二十六聖人」映画上映会 @カトリック桜町教会

つくられていく聖地の〈発見〉

1865年、歴史に残る驚くべき出来事である〈信徒発見〉が起きた。長崎の大浦天主堂で、プチジャン神父のもとに10名ほどの潜伏キリシタンが訪れたのだ。長い迫害と弾圧の時代を経てもなお、キリスト教信仰は密かに継承されており、試練を乗り越えた信者たちの存在がようやく明るみに出た。

日本におけるキリスト教の布教は、1549年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルの来日によって始まる。これにより、「キリスト教の世紀」が訪れた。しかし、1587年には早くも禁教令が出され、キリシタンの取り締りが強化されていく。そのような状況の中で、キリシタン大名の高山右近とイエズス会のオルガンティーノ神父は、小豆島に一時身を潜め、迫害を逃れた。小豆島はキリシタン大名の小西行長の領地でもあり、1586年には約1400人の島民が洗礼を受けたという記録が残っている(近藤 2002:52-64)。近年、高山右近はローマ法王庁から福者の称号を受け、小豆島を含む彼にゆかりのある地は〈巡礼〉の対象となりつつある。

本カフェでは、小豆島に残るキリシタンの歴史に触れるため、いくつかのフィールドワークを企画した。カトリック小豆島教会の関係者や「小豆島キリシタンの足跡をたどる会」の会長である日向光徳さんの協力を得て、高山右近の隠れ家とされる場所、キリシタン灯籠、十字架が刻まれた墓石などを巡り、小豆島のキリシタン史跡を歩いた(日向 2020:420-426)。この場を借りて、心より感謝を申し上げたい。



ミサ後、高山神父と(2024年10月20日)

このフィールドワークを通して、今後さらに考察を深めていきたいテーマが2つある。

1つ目のテーマは、虚構のキリシタン遺物と〈主観

的真正性〉の問題。1919年、大阪府茨木市でキリシタン遺物が発見され、〈キリシタン・ブーム〉が巻き起こった。ちなみに、この時期には芥川龍之介の〈切支丹物〉も発表されるなど、キリシタンに対する関心が高まっていた。同志社大学の三輪地塩氏は、この一種のキリシタン流行が、民衆レベルでキリシタンに対する「非学術的な関心」が芽生える契機となったと指摘している(鬼束編 2024:49)。また、「日本各地で新たに『キリシタン遺物』が次々と『発見』される」一方で、その中には「虚構系資料」も紛れ込んでいた(鬼束編 2024:23)。こうした歴史的背景を踏まえると、キリシタン資料や遺物は慎重に検証する必要があり、確証を得るにはさまざまな条件をクリアしなければならない。

しかし、私が関心を持っているのは、〈本物〉か〈偽物〉を暴くことではない。むしろ、あるキリシタン遺物がどのようにして〈真正性〉を確保されていくのか、そのプロセスに注目したい。この点で、青森県の「キリストの墓」の宗教社会学的考察は示唆に富む。宗教学者の岡本亮輔氏は、次のように述べている。

「キリストの墓の事例が示すのは、現代における本物と偽物の境界の曖昧さである。ホストやゲストの主観的な部分において生じる真正性は、現代の聖地巡礼について考える際にますます重要になる。なぜなら、世俗化と私事化が進む社会においては、単一の価値観や世界観が社会全体で共有されることはないからである(中略)現代では、伝統的には聖地とされてこなかった場所が聖地になることもある。かつては限られた人々にのみ聖地とされてきた場所や、そもそも聖地として考えられてこなかった場所が意味を持ちうる。その場を取り巻く人々の情緒や主体的な関与、そしてゲストとホストの交流が重要な要素になると言えよう。」(岡本 2015:149-150)

小豆島のキリシタン史跡を巡りながら、岡本氏のこの言葉が常に頭の片隅にあった。小豆島のキリシ

タン史跡めぐりは、〈聖地巡礼〉の領にはまだ達していないが、確かに〈つくられていく聖地〉のプロセスを垣間見ているように感じた。そして、私たちのカフェの活動もまた、もしかするとそのプロセスの一部を担っているのかもしれない。



キリシタン史跡めぐり（2024年10月20日）

2つ目のテーマは、キリシタン・イメージの構築と変容。宗教学者の芦名定道氏は、次のように指摘している。「キリシタン禁制によって、実在のキリシタンが日本社会の表面から消えるなかで、キリシタン・イメージが自己増幅し、歴史的実在としてのキリシタンから淫祠邪教的存在一般へと拡大される」（芦名2024:38）。長らく邪教視されていたキリシタンが、大正時代に入ると〈キリシタン・ブーム〉によって多方面から関心を集めるようになる。そして戦後には、学術的研究が進むと同時に、遠藤周作の『沈黙』（1966）など文学作品がキリシタン・イメージに大きな影響を与えた。さらに、2018年には、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録され、キリシタンは国内外でも誇るべき文化遺産として位置づけられた。こうしたキリシタン関連遺産の〈観光化〉は、小豆島のキリシタン史跡にどのような影響を与えるのか、今後注視していきたい。また、〈信仰なき巡礼者〉にとって、小豆島のキリシタン史跡はどのように映えるのか。そして、彼ら彼女らにとってどのよ

うな意味を持つのか——これらの問いを引き続き探究していきたい。



「高山右近潜伏の地」石碑前にて、日向光徳さんと（2025年2月1日）

参考文献

- ・ 芦名定道, 2024, 「キリシタン時代から現代へ、日本宗教を展望する」『福音と世界』79(7): 36-41.
- ・ 日向光徳, 2020, 「小豆島のキリシタンと高山うこんの足跡」五野井隆史監修『潜伏キリシタン図譜』かまくら春秋社, 420-426.
- ・ 近藤春平, 2002, 『讃岐切支丹諸考 補訂版』美巧社.
- ・ 日本社会学会社会学辞典刊行委員会編, 2010, 『社会学事典』丸善出版.
- ・ 岡本亮輔, 2015, 『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで』中公新書.
- ・ 岡本亮輔, 2023, 「考えるな、感じろ—精神世界とスピリチュアル文化を分かちもの」『現代思想』51(12): 54-63.
- ・ 鬼束芽依編, 2024, 『創られたキリシタン像 排耶書・実録・虚構系資料』花乱社.
- ・ Seiple, Chris and Dennis R. Hoover, eds., 2022, *The Routledge Handbook of Religious Literacy, Pluralism, and Global Engagement*, London: Routledge.
- ・ 釈徹宗, 2018, 『異教の隣人』晶文社.

コミュニティ・シアターを構築する

担当教員：仙石 桂子

西谷 清美

マグノリア・カフェの紹介

コミュニティ・シアターの歴史は、1910年代に遡る。ルイス・バレー（1917）は、「公共体」を「一つの政治的集団」であり「共通の関心を持つ人々が、教養したり参加したりといった特権を与えられる」場所と定義し、民族・宗教・興味関心の3つの共同体が存在すると述べている。また、実際はそれらの共同体のメンバーはばらばらであり、「親和もない住民を一致させ、協力させる機関」がないため、公共体を結びつける公共劇場の設備が必要であるとバレーは主張する。

現在の「ノトススタジオ」は徐々に地域の人、中四国のみならず、県外の演劇人などが集まり演劇を見に来る場所になってきている。アフタートークなども行われ、時に観客とのやり取りも行われる。ただし、この場所には、新たな客層がすぐにたくさん集まることはない。演劇コースができてから多くの時間をかけ、この劇場の顧客を伸ばしてきた。しかし、ここでの学びが「演劇」に興味のある一部分になってしまっているのも現実としてある。

そこで、この劇場のみならず、私たち演劇を学ぶもの（学生）や演劇を教えるもの（仙石）、そして演劇によって新たな発見を得たもの（西谷）による新たな共同体が街の中に繰り出し、大学の内外で、「親和もない住民を一致させ、協力させる機関」の構築が可能なのかを模索する。

（仙石桂子）

「ダンデライオンズ」高知公演の意義を考える

◇演劇との出会い

そもそも演劇とは何だろうか。演劇家の河竹（1978:1-25）によると、「言葉と身振りによって表現される芸術の一形態で、人間社会において常に存在

する文化の一様式である」という。日本では「芝居」と言い慣わされてきたものが、明治期以降「演劇」と呼ばれるようになったらしい。ヨーロッパにおいては、シアター（英語）、テアトル（フランス語）、テアター（ドイツ語）と呼ばれ、これらは古代ギリシャ劇において「見る場所」を意味するテアτρον(theatron)から起こったと言われている。この語源には演劇の本質として観客の重要性が示されている。

また、演劇には三要素があるとされる。いわゆる「戯曲」とそれを演じる「俳優」、そして「観客」である。ここで肝心なのは観客が演劇に果たす役割であり、舞台の良し悪しに対する反応が直ちに舞台に及ぶ。このことは、ある意味社会福祉援助における援助者と被援助者の構図に類似しているかもしれない。ソーシャルワークでは、被援助者（クライアント）は単なる支援やサービスの受け手としてではなく、能動的かつ積極的に援助場面（過程）に参加する存在であるとされる。劇場という「場」において俳優と観客が根源的に一体であることと、生活の「場」において援助者と被援助者が対話し協働することとはどことなく似通っており、「場」の力を引き出しその場で対話するという部分は、俳優と援助者の共通点かもしれない。

◇社会福祉と演劇「ダンデライオンズ」

さて、仙石が描き出した「ダンデライオンズ」とは、いったい何だったのか。私自身、精神保健福祉を専攻する教員として、さらには障害福祉サービス事業所を運営する NPO 法人サヤの理事として、「ダンデライオンズ」誕生（2022）の経緯に深くかわかり、事業所を利用する精神障害当事者と演劇を学ぶ学生の間

に立って福祉と演劇の協働を模索、調整し、後押ししてきた。また、自らも役者として精神障害当事者の父親役を演じる機会を得た。そこでは、精神保健福祉分野のソーシャルワーカーとして活動してきた経験から、精神疾患罹患の前後から障害当事者と家族の双方に沸き上がる両価的な感情について体験的にある程度認識していたつもりだったが、いざ演じてみると自らの内側で葛藤する感情をどのように表出すればよいのが全くわからず狼狽えてしまった。もちろん、演技を学んだ経験もなく当然と言えばそれまでだが、簡単に言うと覚えたセリフを単に唱えているにすぎず、目の前のその人（他者）が表出する感情に全く呼応できなかったのである。社会福祉援助は相手の感情に適切に呼応することを技術として求めている、そのことなくして援助関係は成り立たない。だとすれば、ソーシャルワーカーを自認する私の援助技術に幾分かの課題が残るということなのか。学生たちに目を向けてみる。飄々と役を演じ、他者が持ち出す感情に呼吸を合わせている。まるで一連の芝居の中に、他者理解への道筋が隠されているように思えてならない。「今ここ」で起きる感情と向き合い、その時点での「誰か」になりきることが生み出す思わぬ創造性は、未知の人同士の出会いであるソーシャルワーク実践にも深く関連づくと思われる。



柿沼さんの話

いずれにせよ「ダンデライオンズ」との出会いは、私自身のソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを揺るがす一大事となったのである。

◇「ミニシアター蛸蔵」公演の意義

「ダンデライオンズ」が描いているのは、3人の精神障害当事者の物語である。精神病発症の契機から、精神医療や保健福祉サービスの利用者としての体験や、専門職や家族とのかかわりの足跡を、精神障害当事者が繰り出す言葉を拾い集めてリアルに描かれている。誰もが経験する進学、就職、恋愛、結婚などのライフイベントが、精神病の罹患を通して歪なものに変わり果てる瞬間を、役者たち（学生、精神障害当事者、他）は見事なまでに演じ切った。精神医学や診断学、精神症状などの知識がなくてもいっこうに構わない。ダンデライオンズで仙石が描こう（テーマ）としたのは精神病者の病の体験記などではなく、どこにでもいる当たり前の一人の人間の生きづらさの物語である。そこには、精神疾患をいつ誰に起きても不思議ではない疾患としてとらえる視点が必要である。ある日突然始まる不可解な体験、謎の声、自分以外の周りがすべて異質に感じる感覚、軋轢、そして家族への両価性感情等々。それらの体験の一つひとつが生きづらさにつながっている。

2024年秋、高知市内の「ミニシアター蛸蔵」に向かう。小さいながらもまちの人たちのつながりで存続している文化・芸術活動の拠点である「蛸蔵」での公演は、私とNPO法人サヤの関係者にとって刺激的な経験となった。

物語の幕が開き、観客が息をのむ。役者と観客との距離が近い。お互いの息づかいがはっきりと聞こえる。シアター、つまり「見（観）る場所」が放つ力は、例えば時に観客の心をかき乱し、一人の人間の苦悩をこれでもかと痛烈に感じさせる。まるでキャストの身に起きていることを自分事のように感じている

かのである。

劇作家の平田（1998:169）は、「演劇を作るとはコンテキストのすり合わせである」と述べている。そこには、言葉のコンテキストのみならず身体コンテキストがあり、そのすり合わせができていないと、役者と演出家、役者と観客といった関係の中に理解が成立しないと言う。こうした見解には、劇場という「場」とそこに集う人々を対等に配置した上での「わかり合い」や理解の共有を目指す姿勢がある。これもまた、社会福祉における援助関係形成の基本そのものである。



野村さんの話

◇地域福祉の予感

諸外国の地域福祉実践を概観すると、地域の空き地を使って、地域住民が主体となり農作物や果樹、花等を植える「コミュニティガーデン」と呼ばれる活動がある。花や果樹を見て嫌な思いをする人は少なく、また農作物は住民の健康改善や食育にもなる。こどもから高齢者まで誰でも参加でき、そこには誰でも担える役割がある。この考え方をそのまま「コミュニティシアター」に置き換えることはできないだろうか。地域福祉で語られる「住民主体」や「地域活性化」等の言葉が、今後は演劇の世界でも共通用語とし

て常用されるかもしれない。社会福祉の専門家として、演劇が持つ力に大いに期待を寄せるところである。（西谷清美）



後藤さんの話

学生による感想①

私がこの度、ダンデライオンズ高知公演に関わらせて頂いて、感じた事は普段の演劇以上に人との繋がりが強い座組であったと感じました。

人の人生を題材にしており、またモデルとなった人が座組内に居るということで、普段演劇をしない方と作品を作り上げていく事になるのですが、お互いがお互いを尊重し、支えあって完走出来た公演であったと感じました。

また、お客さんに与えた公演の意味としては、就労継続支援 B 型事業所で働いて、社会で生きづらさを感じていた人達の苦悩、という普段触れない世界に演劇を通して触れてもらい、知ってもらおうという事が大きいのではと考えます。就労継続支援 B 型事業所で働いている人と関わる事は少なく、その人がどのような人で、どのような事に悩んでいるかを知る機会ほとんど無いのではないのでしょうか。今回の公演を通して、そういった人達の歩んできた人生を知り、理解を持った人が増える事で、今後生きづらさを感じる人が少しずつ減っていくのではないかと感じました。（社会福祉学部 4 年・吉田蓮）

学生による感想②

ダンデライオンズに関わり自分自身に対して厳しい自分を認めていこうと決意しました。ダンデライオンズには B 型支援の利用者が役者として関わってくれています。B 型支援の利用者と聞くと心理の授業で見た姿が浮かびます。喜怒哀楽が少なく、会話せずコミュニケーション能力が乏しいイメージでした。しかしたんぼぼの皆さんはすごく協力で驚きました。自分の過去の話では後悔や辛かったことも赤裸々に話してくださいました。私は初めて最初から最後まで出演させていただきました。短いスパンで色々な登場人物をすることによりどんどん自信がなくなってきました。だれよりも厳しい自分によってどんどん追い詰められていきました。自分を認めてもいいのかなあと感じたのはたんぼぼの方が 100%を求めすぎると出来たことまで見れなくなる。それが一番悲しいことと教えてくださいました。20%や 10%でも出来たことを認めていこうと決めれました。

観客の中でも 100%を目指しすぎて生きていくのが辛くなっている人に、息の抜き方を教えてくれる演劇になったと思います。とても誇りに思える劇に参加できてとても嬉しかったです。

(社会福祉学部 4 年・堤晴香)

学生による感想③

◇ダンデライオンズ高知公演に関わって

3 回目であり、一区切りとなる今回。私の代は初演から関わっていることもあり、同期とも話していたがとても感慨深いものがあつた。初演とはメンバーが異なり、毎回同じ人は少なかったがメインであつた柿沼・後藤、どの作品にも出演していた役者・ダンサー、私も裏方として一緒に作りあげてこれて大学での演劇の半分はダンデライオンズだと思う。私が大きな舞台で照明をしたのはダンデライオンズの初演が初めて。それもあり、最後もまたこの作品で照明

ができることがとても嬉しかった。

香川をでての公演はこれが初めてで、県外に行ける嬉しさとそれだけこの作品が評価されているんだという実感があつた。演劇と福祉のコラボでもあるこの作品は、どちらも深く勉強できるこの大学でしかない内容だろう。初めての劇場で芝居を作れることも、初めての場所で初めての機材を扱うこともとてもよい経験になった。おそらく関わった皆が今後の役者や裏方人生においてかなり役立つことを学べたと思う。

こども福祉にしながら演劇をしている私にとって、この作品はとても思い出のあるものである。社会福祉として学んでいることを演劇的表現を活用して当事者を含め様々な人に伝えるという経験は、なかなかできない。映像作品やドキュメンタリーもあるが、保育学生や大学生のうちに経験できるのはとても貴重だと思う。

◇観客に与えたであろう本公演の意味

本公演は観客観客に影響を与える前に関わった人にも大きな影響を与えたと思う。初演では社会福祉と演劇の先生とそれぞれを学ぶ学生がおり、お互いの分野に初めて関わって知ることが目的の 1 つになつていて感じた。2 回目ではほとんど演劇の人ばかりになり、演劇をしている人が社会福祉、障害について学ぶ機会となつていた。3 回目では初演で最年少だった私たちが 4 回生となり、障害についての理解がある上でさらに深い演技・演出が行われていた。

本公演は当事者からの話をもとにフィクションや比較的ポップな表現を活用することで、抵抗が少ない状態で当事者の背景や経験を追体験することが出来た。この作品では、言葉だけでは理解が難しい当事者の思いやひとりの人間としての人生を演劇的要素を活かして知ることができる。これまでで 1 番舞台と観客が近く、目の前で行われていることを「他人

事」ではなく「自分事」として捉えられた人も居たのではないかと思う。

(社会福祉学部 4 年・古賀美優香)

参考文献

- Burleigh, Louise, 1917, *The Community Theatre in Theory and Practice*, Boston: Little, Brown and Company.
- 平田オリザ, 1998, 『演劇入門』講談社現代新書.
- 河竹登志夫, 1978, 『演劇概論』東京大学出版.
- 西尾祐吾・橘高通泰・他編, 2005, 『ソーシャルワークの固有性を問う』晃洋書房.
- 桜井政成, 2020, 『コミュニティの幸福論』明石書店.

Yongaku Well-being Network 2024

担当教員：北川 裕美子

活動の背景と問い

本カフェは、昨年度に引き続き、現代社会における「Well-being」の実態について、大学内での所属や枠組みを越えた学生同士や、大学外に所属する様々な他者とのインタラクティブな関係（対話や身体表現等）を通して深掘りするための活動とする。昨年度は、本学の学生における「Well-being」が高まっている状態について確認することから始めた。学生からは「ケガや病気にならず健康に過ごせること」、「自分が思っていることが実現できて、自分にとっての普通の生活が送れるような状態のこと」、「自分が好きなタイミングで好きなことを好きなだけできること」、「当たり障りのない生活が過ごせる状態」、「人間関係に悩まされることなく1人で悠々自適に日常を過ごせる状態」といった内容が意見としてあがった一方で、「周りに本音で話せる人や頼れる人がいること」、「自分だけでなく、家族や友人など周りの人々も幸福で充実している状態」といった意見もあった。

他方で、アメリカのミシガン大学では、大学生に向けたアプローチの1つとして「Well-being」を「教室での授業やキャリア教育を超えた概念」として重要視し、さらに、8次元（emotional/mental, physical, occupational, social, spiritual, intellectual, environmental, and financial）に分類をし、それぞれの次元に基づいた様々なプログラムを実施している（図を参照）。

ところで、前述の学生が考える「Well-being」が高まっている状態を、8つの次元に照らし合わせてみると、主に emotional/mental（感情）、physical（身体）、social（社会）といった次元に該当するかもしれない。たしかに自分が好きなことができたり、健康でいられることは「Well-being」の向上につながるかもしれないが、これらのことは、どちらかといえば「Well-

being」の下位概念である「Wellness」な状態に近いように思われる。身体的・精神的に健康であることだけでなく、もっと幅広い次元に働きかけるような活動を本カフェで実施することができないか、あるいは自分だけでなく他者の「Well-being」を高めるために行う活動として、本カフェができることが何かあるのではないかと考えた。

本カフェでは本学学生に対する包括的な働きかけを通じて、彼らの現在・将来に直結に結び付くであろう「Well-being」についてより広い側面から理解を深めていきたい。



図 8 Dimensions of Well-Being

活動の報告

主に3つ活動を実施した。1つ目はマグノリア学寮の学寮生が交流できるような活動、普段の寮生活とは違う別の場所で学部とか学年を超えた学生互いが交流をすることを通じた活動である。いちご狩りやボーリングに行ったりと、今年度はアクティビティな活動ができたと感じている。



たかなと思うのでこのようにコラボできたことが良いきっかけになったのではないかと考える。

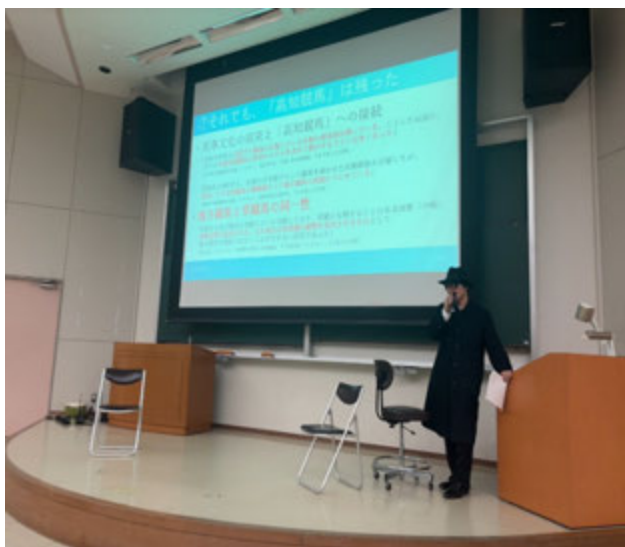
また、運動会のような形で子どもたちと一緒に活動を行った。ハロウィンということもあり、仮装をしたり、様々な活動ができた。また子ども食堂での活動では、実際に赤ちゃんを抱っこしたりするなど、様々な経験ができたのではないかと考える。



2つ目の活動として、子どもたちと交流をする活動を実施した。具体的には、宇多津町にある特定非営利活動法人が運営している地域の親子の居場所づくりをしている活動に携わっている人たちとの交流を行った。例えば大学祭では、宇多津町でダンス部と活動をしている小学校高学年から中学生の子どもたちと一緒に活動をした。これは他のマグノリア・カフェとのコラボとして実施した。本学のダンス部も一緒に行ったが、子どもと関わるという機会はあまりなかつ



3つ目の活動として、大学祭の中で文学部3回生の森田大翔さんに、「戦後の高知県における草競馬」というテーマで発表をしてもらった。711の教室で、約1時間実施したが、40分程度の発表のあと、20分ほど教員とディスカッションを行った。他者との共存をどのように考えていけばよいのかといった話にもつながり、今後も引き続きこのような機会を作ることの必要性を強く感じる事ができた。



今後の課題

今年度の問いとして、「Well-being」を高めるために幅広い次元に働きかけるような活動を実施することができないか、あるいは自分だけでなく他者の「Well-being」を高めるために行う活動はできないかということを考えた。その結果、昨年度とは異なる形での活動を実施することができたと思う。

例えば大学祭で実施した研究発表のような場である。単に関心事をまとめて発表するだけでなく、他者と議論をするような時間を設けることによって、アカデミックな活動へと展開する可能性を感じる事ができたため、今後は定期的にこのような活動を行ってきたい。

今年度活動を行う中で感じた課題として、マグノリア学寮の活動等と本活動とを連動させて実施した

内容が多く、学生が主体的に企画をしたり、活動に携わるという時間が少なかったことがあげられる。

筆者が主に活動内容を考え、そこに参加することによって、様々な次元から Well-being を高めることができたかもしれないが、今後はさらに学生にとってより良い機会となるように、学生が自ら主体的に活動や研究をすることができるカフェを行っていきたいと考える。

★活動に興味がある人は、ぜひ下記のメールアドレスまでご連絡ください。お待ちしております。

ykitagawa@sg-u.ac.jp

参考文献

- University of Michigan, “8 Dimensions of Well-Being,” (Retrieved February 7, 2025, <https://offcampus.umich.edu/article/8-dimensions-well-being>).

カフェ Z

担当教員：辰巳 裕子

活動の背景

Z 世代とは、1990 年代半ばから 2010 年代序盤に生まれた世代で、2024 年現在 13 歳～29 歳前後の年齢層に当たる。デジタルネイティブ、SNS ネイティブとも呼ばれる Z 世代は、タイパ（タイムパフォーマンス）重視の効率主義、強い仲間志向、仕事よりプライベート重視、多様性を重んじるなど、従来の若者以上に特徴的な価値観を持っている。Z 世代の価値観の特徴としては、「失敗したくない」という保守的な面から、消費面では事前に SNS 等を活用した下調べを充分にして選択的な消費をする一方で、「推し」「ゲーム課金」等自分の好きなヒト・モノに対してはお金をつぎ込むという、これまでの世代にはない行動もみられる（注 1）。コミュニケーションの特徴としては、スマホ等の機器を介して SNS を活用し、いつでも遠く離れた仲間たちとも、一方的・双方向的につながりを持つことができる反面、対面する人とのコミュニケーションを苦手とする特性もある。その姿は、友人以外と出会った場面や、電車や飲食店等、他者と共同の空間にいらながらも個々の時間を過ごす様子からも伺える。一方で、この Z 世代の学生らも数年後には社会人となる。経済産業省は「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」として「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力（12 の能力要素）」として定義している（注 2）。大学生という様々なことにチャレンジできる 4 年間は、部活動・ボランティア・旅行・恋愛など様々な成功体験や失敗体験を通じて、社会人基礎力を身に付けられる期間である。しかし、Z 世代の多くは「失敗したくない」「自分の興味のあるもの」「SNS を介したコミュニケーション」などの特徴があることから、限られた

自己の世界でのみ生活している Z 世代の学生にとって、全ての学生が成功体験や失敗体験をしているとは想像しにくい。

とはいえ、強い仲間思考や、自分が好きな好きなヒト・モノには夢中になれる力はある限り、人と人との関係性や、効率性が悪くとも興味を持てる活動に出会うことができれば成功体験や失敗体験を楽しむことができるのではないかと考える。そこで、カフェ Z では地域・企業（公共団体含む）等との活動、連携、準備、振り返りを通じて、人とのつながりを高める活動を行った。

カフェ Z では、地域での活動が主となるため、イベント等の活動に備えてメンバーでの T シャツを作成することにした。デザインは、大学のロゴを生かしながら、お茶を飲みながら温めて進めることをイメージし作成を依頼。シャツやロゴの色は学生らと話し合いながら決定した。



カフェ Z ロゴ

2024 年度カフェ Z 活動内容

日時	場所	内容	連携先
5月11日	イオン高松	幼児運動測定（幼児を対象とした運動）	（株）ビザビ・イオン高松
7月19日	高松信用金庫（本店）	高松まつり 振り付け指導 A 班	（株）Purelax・高松信用金庫
7月24日	高松信用金庫（本店）	高松まつり 振り付け指導 B 班	（株）Purelax・高松信用金庫
7月26日	高松信用金庫（本店）	高松まつり 振り付け指導 A 班	（株）Purelax・高松信用金庫
7月27日	四国学院大学	トーク＆ライブ	GAJU-MC・森川（教員）
7月31日	高松信用金庫（本店）	高松まつり 振り付け指導 B 班	（株）Purelax・高松信用金庫
8月7日	高松信用金庫（研修セン）	高松まつり 総練習	（株）Purelax・高松信用金庫
8月9日	高松信用金庫（研修セン）	高松まつり 総練習	（株）Purelax・高松信用金庫
8月10日	高松まつり	総踊り参加 キッズ指導	（株）Purelax・高松信用金庫
8月31日	イオン高松	幼児運動測定（幼児を対象とした運動）	（株）ビザビ・イオン高松
10月12日	宇多津保健センター	ダンス指導	特定非営利活動法人 L'espace labo
10月13日	四国学院大学	大学祭コラボ出演	特定非営利活動法人 L'espace labo
11月14日	宇多津イオンタウン	ダンス公演・食事会	宇多津町・香川県内大学
11月26日	ガスト 普通寺	食事会	

活動報告

年間を通じた活動について以下に大別して報告する

1. GAKU-MC×カフェ Z トーク&ライブ

本学に、ミュージシャン GAKU-MC を招く。当日の運営として会場準備や受付・司会・片づけまで学生が主体となって関わる。当日はファイブアローズ敷内ヘッドコーチや根来 新之助選手も参加。当初、参加した学生らは緊張した様子で会話も弾まなかったが、少しずつ場も和み本番までに学生らと食事を交えて会話を楽しんでいた。参加した学生からは、「ライブの運営等は初めてで司会も緊張したけど、とても勉強になったし楽しかった！」と述べていた。



司会



ライブの様子

あり、メンバーに公式 LINE にて投げかけ興味のあった学生が各会 4 名～5 名参加。当日までに、運動遊びに参加した子どもたちに渡す、参加賞の準備も研究室に集まり行う。各会ともに 200 名の子どもたちが参加し楽しむ。メンバーの役割としては、平均台や鉄棒・マット運動等のタイムキーパーや見守りをしながら、子ども一人一人に対し、頑張った部分を記録用紙への記入や声かけを行う。子どもたちも大学生が見守ることにより「普段はできない～手伝って～と、私たち（保護者）に頼るのに、今日のはりきって頑張っていた！」「できなかった前回りも少し補助があったらできるようになってびっくりした！」と声をかけていただいていた。安全面の配慮等、緊張しながらのイベントであるが、子どもたちの笑顔と保護者との会話でメンバーは終始笑顔であった。連携企業のスタッフの方とは、挨拶程度での会話であったが、スタッフの方が四国学院大学卒業生であることを自己紹介として話し、大学のことについてメンバーに会話すると、肩の力が抜けたのか準備等についても積極的に話しかける姿が見られた。

2 回目の同様イベントには活動中も子どもや保護者との会話もスムーズであった。



サポートの様子

2. 幼児運動測定

イオン高松店にて幼児運動測定開催運営の依頼が

3. 高松信用金庫振り付け指導

株式会社 Purelax より、高松信用金庫（高松営業部）一合まいたの振り付けと指導について、声がかかったため、カフェZのダンス部所属メンバーに声をかける。振り付けと指導料も入るため責任がある仕事であったが、メンバーはぜひチャレンジしたいとの返事だった。踊りの制作にも期日があったが、それぞれが振りを考えダンス部練習室を借り 3 週間ほど創作活動を行う。その後、夕方に本店へ行き社員の方に、指導を行った。窓口社員の方が、2 名共に四国学院大学卒業生で学生らとともに暖かく向い入れてくださり、また、ダンス部の先輩でもあり、当日までも緊張していた学生も会話が弾んでいた。



ダンス指導の様子

ダンスの振り付けでは、提灯をもって踊るというアイデアを学生より企業に提案し採用される。後半はキッズ部門指導も行う。大学生のメンバーと遊ぶことから始めた練習で、子どもたちも大変よろこんでいた。また、キッズの提灯は社員とは異なる白色とし、子どもたちが自由に絵を描き個性あふれる提灯を持って楽しみながら踊れるという工夫を提案した。指導の後半では、グランド練習として出演社員全員で本番同様に練習を行う。グランドにはコーンや白線を引く等の準備を要するが、学生らは早めに行き積極的に準備を手伝う。初めての経験で、準備に戸惑

う所もあったが、2 回目には要領も理解しスムーズに準備が行える。参加社員は新人が殆どで学生と年齢も近い。練習を通じての会話は少なく感じたが、社員が着用している洋服が同じ推しのアニメであることに気がついた学生は、自ら声を掛けて会話を楽しんでいた。



キッズダンス指導の様子

高松まつり本番当日は、2 名の学生が参加する。社員同様にヘアメイクもプロの業者にいただき、メンバーは祭りを楽しみにしていた。決起集会にも講師として参加させていただく。上役等にも挨拶をしながら、今回の意気込みやお礼を自分たちの言葉で伝えることができていた。

4. ダンスイベント

特定非営利活動法人 L'espace labo より、大学生との交流依頼があったため、高松まつり同様に声をかける。メンバーは大学祭で一緒に踊ることを目標にハロウィンダンスを指導。子どもたちからは、カッコいいダンスに声上がる。大学祭ではメンバーらと円陣を組みよいステージとなるよう声を合わせていた。保護者からは、大学という場で子どもたちが交流を図れたこと、子どもたちからは大学祭がとても楽しかったと感謝の言葉をいただく。



大学祭

また、イオン宇多津で行われたイベントにも参加。県内の大学がすべて集まるダンスイベントは初めてで、大学生同士の会話が弾むかと思ったが、互いにその場で会話する姿は見られなかった。しかし、後日ダンスイベントで見かけた学生に声をかけると、イベントにてインスタグラムを交換しており、互いのダンス公演に足を運ぶようになったとのことだった。



県内の大学生と交流

5. 食事会

イベント準備の際のお茶を交えての会話・イベント終了時の食事等不定期で行う。最後の食事会では、より自主的に参加するためのアプローチについて話し合う。

1年間の活動を通じて：カフェZの活動は、LINEグループに登録し、様々なイベントを教員が投げかけ、興味がある学生が自主的に参加するという、不定期な活動である。イベントに参加した学生は、最初は

緊張するが徐々に積極的に活動し、楽しかったという感想も述べる。

課題としては、自主的な参加を促すが、グループにイベントを案内し参加の返事を待つも誰からも返信がないことである。そのため返答しやすいようノートにあげ名前を記入しやすることや、投票BOXに変更するも同様になかなか返信がなかった。そのため個別に誘うとすぐに「参加します！」の返事があり活動メンバーがそろそろ。そこで、食事会にてそれについて投げかけると「1番に名前を入れることは気まずい」「だれが集まるかわからないから」とカフェZの問い「失敗をおそれない」活動課題は、解決できていないと感じた。しかし、企業や地域の方との積極的な交流は回を重ねる毎に積極的に行う姿も見られた。また、1月にはメンバーから来年の活動提案もありメンバーの意欲が芽生えたとも感じる。

今後も、地域・企業・人等と関わることで、視野や知識経験値を広げながら楽しむ大学生活を、メンバーらと共に創りあげられるよう活動を継続させたい。



食事を交えての振り返り

注

- ・ 野村総合研究所, 2024, 「Z世代」, (2024年4月15日取得, www.nri.com/jp/knowledge/glossary/1st/alphabet/generation_z).
- ・ 経済産業省, 2018, 「人生100年時代の社会人基礎」(2025年2月10日取得, www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html).

付録① マグノリア・カフェ ストール（大学祭） & フォーラム（報告会）

文責：ネルソン橋本 ジョシュア諒

マグノリア・カフェの年間行事

10月13日（日）に開催された大学祭では、各マグノリア・カフェが大学祭の企画と連動し、出店、展示、上映会などを実施した。さらに、1月29日（水）から2月12日（水）までの2週間にわたり、各カフェが制作した映像をYoutubeで配信し、オンライン上で年間活動報告会を行った。本ページでは、ストールの活動を中心に、その内容や写真を掲載している。



「戦跡と戦争の記憶を考える」展覧会&上映会
@724 教室



「日韓文化コラボ」映画上映@514 教室



「ポストモダン学校カフェ」上映会@512 教室



「“不快”な学寮の可能性を追う」と「Yongaku Well-being Network 2024」発表会@711 教室



「珈琲・ホビー・ハウス」出店、展示など@712 教室



「Barefoot」ドリンク出店@野外テント

付録② マグノリア・カフェに関する規程〈一部抜粋〉

20世紀後半から21世紀にかけて静かに、しかし確実に、私たちの社会は分水嶺を通過した。消費社会、ポストモダン、ノンモダン、後期近代、再帰的近代、リスク社会、リキッド・モダニティ、ポスト工業化、情報化、ニューエコノミー、ポスト資本主義、知識社会等、視点によってさまざまな切り口や多少の時期設定の違いはあるものの、近代化の象徴であった重工業と少品種大量生産を中心とする、20世紀の産業社会がこれまでとは異質なものに変容したことは衆目の認めるところだろう。

社会がポスト産業社会へと変貌すると同時に、私たちはこれまでとはまったく異なった諸問題に直面することになった。そのため、これまで妥当性をもっていた学問の理論枠組みや概念装置では、新たに発生した問題を分析したり、解決したりすることができなくなった。つまり、従来の学問・科学は新たな問題に直面して、自らの限界に向きあわざるをえなくなったのだ。学問・科学には今日、根本的な自己変容が迫られている。

本学のリベラル・アーツ教育は、キリスト教主義を基盤に据えながら社会をより善いものに変革し、「自分と他者たちの希望と幸せ」を見いだすことのできる、見識ある人間の育成を目標としている。大学では、新たな形で展開されるべきアクチュアルな問いが発せられ、ラディカルな知的営為が機軸に据えられなくてはならない。

マグノリア・カフェは、課外活動として正規カリキュラムを補強しながら、現代社会に「問いを発見」して「適切な問い方」（問題構制＝パラダイム）を模索する時空を、本学キャンパスに実現しようとする試みである。また、この試みには、西欧発の伝統的手法を採用する。食事を交えての知のコミュニケーション、すなわち会食仲間の形成だ。かつて、古代ギリシ

ャでは、パーティで飲食をともにして知の対話がなされた。シンポジウム＝饗宴の場である。マグノリア・カフェは、四国学院大学版シンポジウムである。

目的

本学の課外活動としてマグノリア・カフェを全学的プログラムとして展開する。その目的は、次の通りである。

- 1) 現代社会を単に自明性のもとに捉えることを越えて、私たちの社会的現実に関々の問いを発見する。
- 2) 教員と学生による内発的動機による知的作業を促進する。
- 3) 学問をシンポジウム＝饗宴として行う機会、すなわち飲食の場を含む知的作業を通して、包括的かつ知的共同体構築の可能性を探る。
- 4) マグノリア学寮でのアカデミック活動の一環として、同学寮の理念である Living Learning Commune の構築に貢献する。

カフェ・カテゴリー

マグノリア・カフェは、以下の3カテゴリーで展開する。

- 1) A
 - i. テーマは、明確に近代社会あるいは現代社会への批判的視点を含む。
 - ii. 1人の専任教員あるいは特例教員Bが、本学正規学生（最低5名）と共に実施する。
 - iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で1回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

2) B

- i. テーマは、実存的あるいは社会的問いを含む。
- ii. 一人以上の専任教員あるいは特例教員 B が、本学正規学生（最低 3 名）と共に実施する。
- iii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、そして、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

3) 共同教育研究

- i. 同年度の 2 つ以上のマグノリア・カフェによる合同特別プログラム教育研究として実施する。
- ii. 「マグノリア・カフェ ストール」を、大学祭で 1 回、又は、「マグノリア・カフェ フォーラム」を、年度末に開催する。

表紙と裏表紙：

Testa, Pietro. 1648. *Plato's symposium: Socrates and his companions seated around a table discussing ideal love interrupted by Acibiades at left*. Metropolitan Museum of Art.

<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/399912>（2025 年 2 月 19 日取得）.

Public Domain の画像に加工を加えています。

マグノリア・カフェ 年間レポート「MARE」 第4集
Magnolia Cafe Annual Report Vol. 4

2025 年 3 月発行

発行所 四国学院大学
〒765-8505
香川県善通寺市文京町 3-2-1
TEL 0877-62-2111

編集 マグノリア・カフェ運営委員会
発行責任者 ネルソン橋本ジョシュア 諒

印刷・製本 株式会社 美巧社
〒760-0063
香川県高松市多賀町 1-8-10
TEL (087) 833-5811



VOS ESTIS SAL TERRAE



SHIKOKU GAKUIN
UNIVERSITY

FOUNDED IN
1949

MARE vol. 4